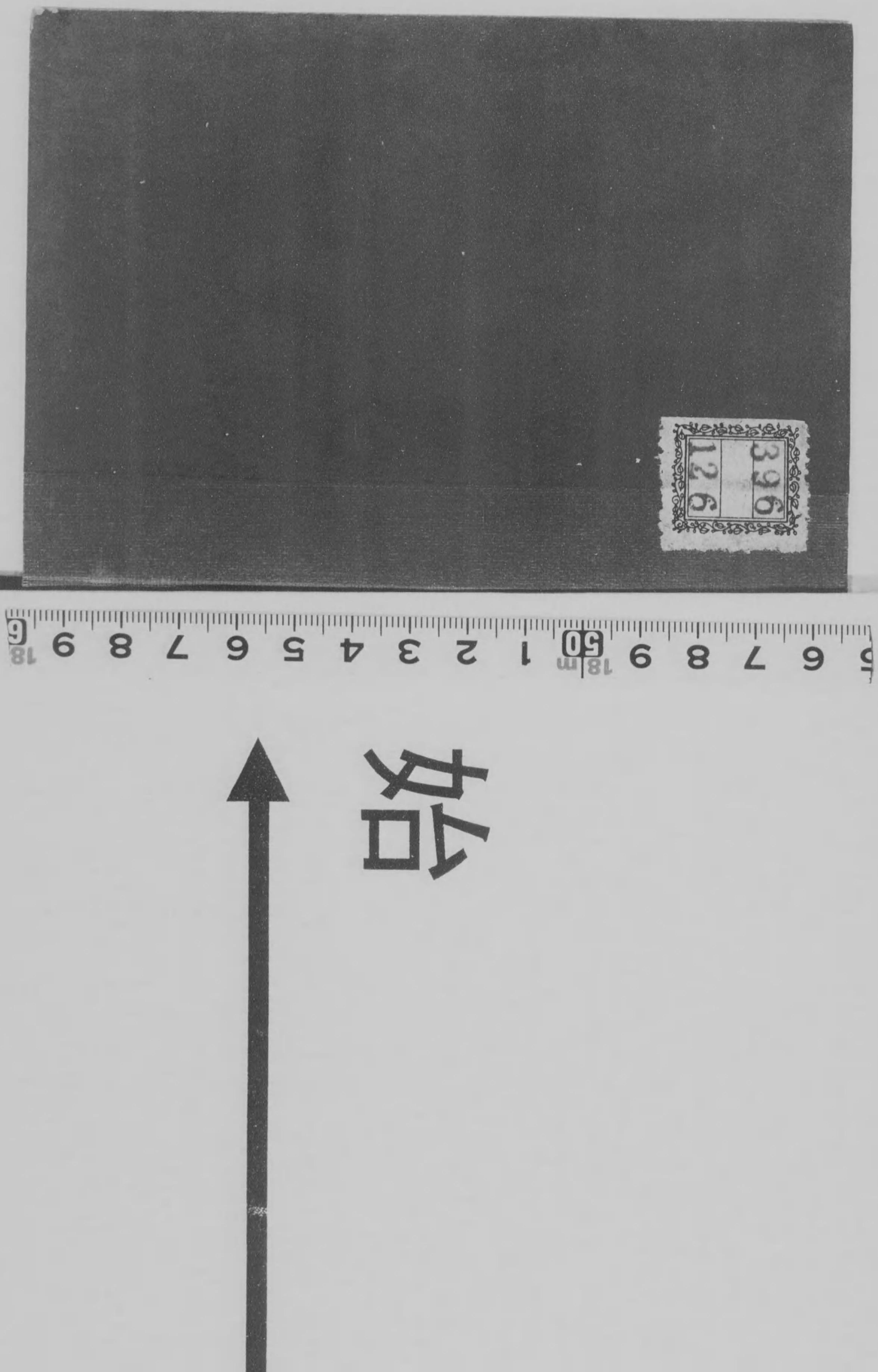
396
126
部

露、プウシユキン著

ツヅブロフスキー

山縣自然訳

大正図書株式会社

12

996-126

序

教養ある人の雄辯に於てよりも、我々は朴訥な野人の言葉に往々感動させられる。表面に織出された巧な語の文を見せられるよりも、我々は、寧ろ、眞實の底から湧出たばかりで、表面に何等の殊更らしい飾を見せぬナイーヴな語の響を聞きたいのである。我々が藝術的作品に於て窺見ようとするものは何かと云へば曇のない眞劍な魂である。我々は常に此の眞劍な魂の叫びを聞く事を渴望する。眞劍な魂の聲が相手の眞劍な魂に觸れた時、如何なる語も語は單なる語でなくなり、内に神祕な音樂とも聞えれば、又床しいピクチュアも描出される。かゝる語にこそは常に生命が充實してゐる。語には夫々特殊のピクチュアと云ふものを描出す固有の響を有つてゐる。語の響は勿論語を以て云表す事は出來

ない。ロシヤ語にはロシヤ語獨特の形式と、それ固有の響とがある。從つて、それをその儘他の國の言葉に傳へる事は到底不可能事であるが、苟もそれが藝術作品であつた場合、飜譯者の使命は、云ふ迄もなく、第一に、出來得る限り忠實にその語の響、卽ち、その語が描くピクチュアなり、何なりを譯語の上に傳移すと云ふ事である。此の點から云つて、私の使命は、原作者が偉大な詩人であつた丈けにそれ丈け難事であつた樣に感じた。

誰でも譯者が自分の良心と云ふものさへ捨てなければ、自分の譯本を出す時には少からず、之を臆し、躊躇するだらうと思ふ。私も自ら此の譯至に不滿を感じ、出すに當つては赤面せずには居られない。けれども、私は自分の譯文に不滿足を感じて、勝手な添削をする事には一層の不安を覺える。序だから云つて置くが、私は此の飜譯をなすに當つて、途中で適當な譯語を探す爲に英譯もち

よい〳〵參照して見た。その點で英譯に負ふ所もないではなかつたが、赤裸々に云へば——如何に英譯が名文美文であらうとも——私はその不注意と、輕卒と、得手勝手に驚いた。私は私の譯文が私の文章にも、完全な日本文にも成り切つてゐない事には、勿論、不滿足を感ずる。けれどもそれは止むを得ない事だ。私の良心はそれを全然私自身の文章に引直す程の横暴さを許容しない。さう云ふ事は原作者を舁上げて、自分を賣らうとする卑劣な行爲だ。自分の文章にして了はねば措かないと云ふ者なら飜譯の筆は持つ事を許されない筈だ。人の書いたものは飽くまで人の書いたものだ、それをまた他の人が無條件で添削してよいと云ふ法はない。それに、私はそれまでには必要を認めない。詰りさうしなくとも良いのである。飜譯と云ふ事の意義は原作を眞似繪取ると云ふ事であるか？そして、それは創作力に乏しい人達の撰ぶべき仕事であるか？そこに

は己自らの個性に餘り交渉を有たぬものであるか？それは大なる誤解であらねばならん。自己を表白すると云ふ點からは飜譯も矢張り自己を表白する事になる事は否定出來ない筈だ。なぜならば、我々が物を觀察すると云ふ場合を考へると、決して我々は如何なる場合、如何なる物に觸れたとしても、無關心で自個の内に無いものを對象から讀取る事が出來得ると考へる事は間違であるからである。我々は常に對象を通して自分自身の内を眺めてゐる以外に何物もない。そこで、此の譯文はプーシュキンの物であつて、同時に私の作品だ、と云つたとしたら、それは強ちに不遜な云分だらうか。とまれ、私は私の譯文が怎んな間の子の形式を取つたとしても、私が原文から本當に讀取り得た丈けをその儘卒直に傳へようとした努力だけで自らの仕事に對する意味を見出す事が出來る。實際、私は此の譯文に於て私が原文から味ひ得たロシヤ語其物の簡素な味

は出來得る限りまた其の儘の形式に移し盛らうと努力したのであつた。私は意味以外にそれ丈け語と云ふものを眞面目に取扱つた譯である。それには何れ丈けの成功を得、又何れ丈けの失敗をしたかは分らないが、少くとも、自らをして今までの飜譯家の常習から脫して、一歩でも踏出したと感ずる事を私の誇とすることが出來る。

それから、私は、未だ邦文譯を見るに至らない數多いプーシュキンの作品中からヅブロフスキーを取出して譯すに至つた事の決して出鱈目な思附でなかつた事を云つて置かなければならない。それは、彼の作風筆致を我々に遺憾なく披瀝してゐると云ふ以外に、その題材を巧に取扱つた事に依つてロシヤの特色と云ふものを實によく描出してゐる。其の點では恐らく彼の作品中之に優るものがない。よしんば、此の作に於て我々が思想的に驚歎すべきものを見出し得

ずとも、又重要にして、深刻な人生問題なり、何なりを提供されなくとも、我々はそれを以て此の作の價値を減する事は出來ない。何となれば、此の作が己に時と所の特色を充分に具へてゐると云ふ丈けでも識者の注意を寄せる價値は十分有つてゐる。

紹介と云ふ意味から云つても、私は決して間が抜けてはゐなかつた事を思ふ、此處で私の云ひたい事は幾らでもある樣な氣がするが、それよりも、一通り作品の梗概を述べて置かなければならない。

此の物語は一八三二年十二月二日プーシュキンがペ、ヴエ、ナシュチョーキンに宛てた手紙から見られる通り、プーシュキンは最初オスツローフスキーと名附けようと思つてゐたものであつて、未完成の儘殘されてあつたものが、彼の死後四年を經て、即ち一八四一年に彼の遺稿十卷を出版するに際して、その中

に現れたのであつた。尤も最初のものは編輯局の極度の等閑からして、脫字、毀損の多いまゝに修補もされないであつたが、後に至つて彼の物は修補改版されたのである。「ヅブロフスキー」の題材はナシュチョーキンがプーシュキンに與へたもので、ナシュチョーキンは、富豪で、權勢家の隣人の爲めに一文無しにされた一貴族を獄舍の中に見た事があつたのである。それに、ナシュチョーキンの友人カローツキー某で、一八三二年にモスクワの一官衙に勤めてゐて、特にその訴訟事件の出來事を知悉してゐた者が、プーシュキンの爲めに、カヅローフスキー(タムボーフスカヤ縣)の地主、近衞中尉イワン・ヤコヴレウイツチ、ムラートフの所領地が陸軍中佐セミョン・ペツローウイツチ・クリユコフに依つて奪取られた事に就いての實際の事件からの抜書をしたのである。それに依ると、ノウオスバースの村で百八十六人の農民共を持つてゐた此の所領が一

七五九年にクリユコフの父からムラートフの父に賣渡されたのである。ところが、一七九〇年ムラートフの家が火災に罹つた折、彼の賣買契約書が燒失した。クリユコフは自分が書類の中に保存してゐた自分の父の昔持つてゐた領地の古い證書を見付け出して、それを郡裁判所へ提出した。ムラートフは何等の證書も提出せず、郡裁判所はその爭の財産の賣買契約書は記錄に保存してゐる筈だと云ふ事、此等の所領は彼及び彼の父が既に七十年以上も領有した事などを說明したのであつたが無益であつた。郡裁判所は一八三二年にクリユコフの勝利と裁決して了つた。ムラートフは控訴の期間を逸して、取返しもつかず、己が身代を失つて了つた。隣人から領地を引取つた事で滿足しなかつたクリユコフは、自然その上に七十年間の全收入をも要求したのであつたが、裁判所は、前に彼がそんな要求を持つてゐなかつたと云ふことを引證して、それを拒んだのであつた。

譯者は煩雜を慮つて、此の處で此以上詳細の記述はしない事にして置くが、プーシユキンは此の事實を根據とし、又プスコフ縣には此の作に現れる如きヅブロフスキーの傳說があると云ふから、彼が其の邊に住んで地方の傳說を聞いてゐて、玆に彼がそのロマンチシズムの筆を縱橫自在に揮つたものと思はれる。彼の作は勿論、時代から云つても想像出來る事であるが、最も高くロマンチシズムの香を放つてゐる。だから、それ丈けで、己に誰が讀んで見ても面白いと感ずる事は確である。然し彼は單にロマンチシズムの奉仕者ではなかつた、彼は已に新しい時代に一歩を蹈込んでゐて、汗泌んだ現實の畫に、嚴肅な人生に面接してゐた。此の立場は彼を偉大な詩人たらしめた所以である。だから、彼は決して讀者をして甘い美酒に醉して置く丈けではない。必ず眞實の底から感動さす所がなくては置かない。

『ヅブロフスキー』に於ては二人の地主ツロエクーロフとヅブロフスキーを巧に取扱つて、一面に地主の暴虐と農民の屈從とを描き、他面に於ては、我々には實際意外である程な、主從間のデリケイトな、實に美しい感情を描いて讀者を泣かしめ、又近衛隊將校の若きヅブロフスキーとツロエクーロフの美しき令孃マーシャとの戀愛はロメオとジユリエットのそれにも似て、美しく、又悲痛にして、最もロマンテイツクなものである。

『お孃さんの百姓娘』は短くして、確に、優れた良い作品である。これをヅブロフスキーの次に附加へた事は稍々意味のある事と認められるだらう。

曲亭馬琴舊蹟の近く
飯田町の假寓にて
山縣自然

大正十年五月

目次

ヅブロフスキー……一
お孃さんの百姓娘……二九
巻頭——プウシユキンの墓（寫眞版）

ツプロフスキー

一

數年前、自分の所有地の一つに昔流なロシヤの紳士でキリーラ、ペツローウイッチ、ツロエクーロフと云ふ人が住んでゐた。彼の富や名高い出生や親族關係やは彼の領地のあつた縣下に於て偉大な尊嚴を彼に附與した。苟も彼を取卷いてゐる程の凡ての人達に依つて我儘爲放題にさせられてゐた彼は自分の熱烈な性情の有ゆる衝動をその激烈なるまゝに、奔放に打ちまかせ、又、可也制限された頭腦の產んだ所の凡ての計畫に全意志を打入れることに慣れてゐた。隣人共は彼の氣まぐれな道樂事に機嫌を取ることに得意になつてゐた。縣の官吏共は彼の名を聞いただけでも、戰慄したのであつた。キリーラ、ペツローウイッチは總ての此等の卑屈な振舞を恰も當然な貢物の如に受入れた。彼の家は常に客で

一杯になつてゐた。夫等の客は馬車を驅廻して彼の貴族的な閑散を慰むることに、又時としては、勇ましい彼の遊興を樂します事に心を用ひてゐたのである。誰一人として彼の招待を辭退したり、或は定日に當つて適宜の尊敬を以てボクローフスコエ村へ見參することに漏れるなどゝ云ふ事を敢てする者は無かつた。キリーラ、ペツローウイツチは非常な客厚遇者であつた。そして、彼の體質の異常なる活力にも拘らず、一週に二度許りは大食して苦しむことがあり、又、毎晩とも微醉氣分に浸つた。屋敷仕の女達の中で此の五十歳の老人の好色の敢爲から遁れた娘と云つては殆どなかつた。

加之、彼の家の傍屋の一つには針仕事をしてゐる十六人の小間使が住んでゐた。傍屋の窓は木の格子で守られてあり、扉は錠で閉切つてあつて、そして、その鍵はキリーラ、ペツローウイツチに保持されてゐた。若い女隱者達は定つてゐる

時刻に於て二人の老女の監視の下に庭園に出て散歩した。折々、キリーラ、ペツローウイツチは彼女等の中での幾人かを嫁に出した。すると其の代に又新しい女が入つた。彼は小作人や屋敷仕の人達を嚴しく、且つ自分の我儘勝手に取扱つた。それにも拘らず、彼等は彼に忠順であつた。彼等は自分の主人の富や榮譽を自慢し、又、彼等は彼の有力な庇護と云ふものを頼みに、自分等の隣人達に對しては虎の威を借る狐であつた。

ツロエクーロフの不斷の仕事と云つては彼の廣莫たる領地の邊を乘廻すことやら、ぶつ通しで酒盛をする事やら、その他毎日案出される惡巫山戯をやる事やらであつた。そして、それ等の犧牲者となつたのは何時も誰か新しい知人であつた——一人アンドレー、ガブリーロウイツチ、ヅブロフスキーは番外で、彼の舊友達にしても何時もそれはよう遁れなかつたのだけれ共。此のヅブロフスキー

は近衛兵退役の中尉で、彼に最も近い隣人であり、七十人の從僕を有つてゐた。最も高貴な人々との交際に於て高慢であるツロエクーロフはヅブロフスキーの低い身分であるに拘らず彼を敬つた。嘗ては服役の時に彼等は仲間同士であつた、そんな事でツロエクーロフは實際に經驗した事から彼の性情の短氣な事や、結斷的なのをよく知つてゐた。功榮ある一七六二年は彼等を永久に引離した。ツロエクーロフは、ダシュコーワ候爵夫人の親族に當る者で、鰻登に立身した。家運を傾けてゐたヅブロフスキーは服務を罷めて、殘つた自分の村に移住まなければならない樣になつた。キリーラ、ペツローウィッチはそれを知つて、自分の庇護を申し來つた。然し、ヅブロフスキーは彼を謝辭して赤貧に甘んじて居た。數年經つて退役陸軍大將のツロエクーロフは自分の所有地に歸つて來た、彼等は再び會面して互に喜び合つた。それ以來彼等は毎日互に顏を會はした。

そして、生れてから何人をも訪ねてやつた事のないキリーラ、ペツローウィッチは何の用もなしに舊い自分の僚友の家へとやつて行つた。同年輩で、同じ樣な家柄に生れ、同じ教育を受けた所から、彼等は幾らかその性質に於ても、また趣味に於ても似通つてゐた。或點に於ては彼等の運命さへも同一であつた。二人共戀に陷つて結婚をなし、二人共早く鰥夫になり、双方共に幼さい子供が一人殘つた。ヅブロフスキーの息子はペテルブルグで教育を受けて居り、キリーラ、ペツローウィッチの娘は親の膝下で成長してゐた。そして、ツロエクーロフはヅブロフスキーに屢々次の樣に云つたものである。

『ねえ、君、アンドレイ、ガブリーロウィッチ、君のウオロヂカが飯を食つて行ける樣になつたら、彼が怎んなに貧乏だつて構やしない、彼にマーシャを遣るよ』

アンドレー、ガブリーロウイッチは頭を振つて何時も答へた、

『否、キリーラ、ペツローウイッチ、私のヴォロヂカはマリヤ、キリーロブナの婿にはなりません、彼の様な貧乏な貴族には貧乏な貴族の女と結婚するが良いのです、要するに、我儘な女に番頭役を勤めるよりか一家の長で居る方がましですからね。』

人々は皆この倨傲なるツロエクーロフと、貧しい彼の隣人との間に存する和親を羨ましく感じた、そして、彼がキリーラ、ペツロ!ウイッチの食卓に着いた時、最後の大膽さに驚かされた、其時、彼は自分の考を赤裸に話し出し、それが主人の考と矛盾しようと何うとそんな事には一向無頓着であつた。或者は彼に傲ひ、適宜の從順の境から蹈出すやうな事をやつて見た、然し、キリーラ、ペツローウイッチからはお目玉を頂戴して、今後決してそんな出しやばりをしてはな

らないと聞かされるのであつた。それに、ヅブロフスキーは一人一般の法則外に取殘されてゐた。想設けぬ出來事は凡てを攪亂して、全く之を一變して了つた。

或日、秋の初に於て、キリーラ、ペツローウィッチは狩獵に出る準備をした。その前夜に牧犬者と獵僕には朝の五時頃迄に準備を整へてゐるやうに命令されてあつた。天幕や臺所は前以てキリーラ、ペツローウィッチが食事をする事に定つてゐた場所へ遣られてあつた。主人と客達は牧犬者の屋敷を見舞つた。其處には五百匹以上の優れた獵犬共がキリーラ、ペツローウィッチの仁恵を犬自身共の語を以て讃頌し乍ら何不足なく溫に暮してゐた。此の處には病犬の爲めに病院さへも建てられてあつて、軍醫長チモーシュカが監視して居り、又隔離所があつて、其處では牝犬が犬兒を產み、そして養育てゝゐた。キリーラ、ペツローウイッチは此の素晴らしい構を以て誇つてゐた。そして、自分の客人の前で

自慢する機會を取逃す樣な事は決してなかつた。その客達はと云ふに、みんなそれを少くとも、もう二十回は觀たと云ふ連中なのである。彼は客達に取卷かれ、チモーシユカや重なる牧犬者達に同伴されて、犬の家を彼方此方と歩き廻り、或は犬小舍の前に立止つて病犬の容態を尋ね、或は規律正しい事と嚴格の事をもつと多くか、それとも、もつと少くかを觀識し、或は自分の知つてゐる犬を呼寄せて親み深く話し掛けなどした。客達はキリーラ、ペツローウイツチの犬舍を嘆賞する事を義務と考へた。然るに、ヅブロフスキーは一人默して顏を顰めた。彼は熱心な遊獵家であつた。併し彼の身分は只二匹の獵犬と一匹の優れた牝犬を蓄ふる丈けを彼に得せしめた、そして彼は此の素晴しい設備の樣を目にしては或る羨望の念を禁ずる事が出來なかつた。

『何だつて君顏を顰めるんだね、兄弟。』キリーラ・ペツローウイツチは彼に尋

ねた『或は僕の犬舍が君にや氣に入らないんかね?』

『否。』とヅブロフスキーは突慳貪に答へた。

『犬舍は全く素晴しいです、併し、貴下に仕へてる人々は貴下の犬と同じ樣に暮してゐるでせうかねえ。』

牧犬者の一人は腹を立てた。

『我々は、へえ、神樣なり、御主人樣のお蔭で人から憐まれる樣な生活はしちや居やせんでがす。』と彼はやつた。『其何でがすて、間違のない話が、中にや其、何、貴族樣にでもでがす、その別莊と此處の可愛い犬小舍と取つ替へる事は損にやならんやうながあるでがすてえ。さうすりや、その、一層腹太うに、一層溫々と暮しが出來やすでのう。』

キリーラ・ペツローウイツチは自分の奴僕の此の大膽なる評言に腹を抱へて

笑つた。而して客達は、牧犬者の冗談が彼等にも當付けを食はされたとは感じ乍らも、彼に倣つて笑つた。ヅブロフスキーは顏を蒼くし、一言も云はなかつた。此の時、キリーラ・ペツローウイツチの許へ最近に產み落された犬兒を箱に入れて持つて來た。彼はそれを檢べて二匹丈け撰出し、餘りは水に投ずるやうに吩咐けた。彼此してゐる間にアンドレー・ガブリーロウイツチは姿を隱したが、誰もそれには目を留めなかつた。

牧犬者の屋敷から客達と歸りがけに、キリーラ・ペツローウイツチは晩餐の卓に就いた、と、始めて其時、ヅブロフスキーの居ない事に氣が付いた。皆の者はアンドレー・ガブリーロウイツチは家へ歸つたのだと云つた。ツロエクーロフは、直ぐに彼を追つ掛けて行つて、間違なく呼返す樣にと命じた。生れて此の方、彼は、經驗に富む、立派な犬の價値に就いての鑑識者であり、且つ、狩獵に關する有

りと有ゆる爭論の正しい審判官たるヅブロフスキーとでなくては一度も狩獵に出掛けた事はなかつた。彼を追掛けて走つた下僕は、皆の者が未だ食事を終らぬ中に再び折返して戻つた、そして、アンドレー・ガブリーロウイツチは聞き入れないで歸る事を欲しなかつたと自分の主人に上申した。キリーラ・ペツローウイツチは自分の平常の節で、眞紅になつて怒り、其の下僕をしてアンドレー・ガブリーロウイツチに、若しも卽刻ボクローフスコエに來て一夜を明さないならば、彼ツロエクーロフは永久彼と和解しない事を申渡す樣再び遣した。下僕は更に馬を飛ばした。キリーラ・ペツローウイツチは食卓を退いて客を去らしめ、そして寢に赴いた。

その翌日に於て彼の第一番の問は斯うであつた、

『此處にアンドレー・ガブリーロウイツチは居るか。』

三つ折の手紙が彼に手渡された。キリーラ・ペツローウイツチは自分の書吏にそれを聲高に讀む事を命じて、次の事を聞いた。

我が仁慈なる閣下！余は閣下が牧犬者バラモーシユカを謝罪を以て余に送り遣はし給ふに非ざるまでは斷じてボクローフスコエに歸還するの意志無之而して彼を罰すると寛宥するとは余の意志に有之候余は閣下の下僕よりの冗談を忍ぶこと能はず然り閣下よりも之を忍ぶの意志無之候如何にと申さば余は道化者には候はで古き家柄なる貴族に候　頓首　アンドレー・ヅブロフスキー

禮儀の今日の理想から云へば、此の手紙は甚だ不都合なものであつた。併し、それは奇態な文體を以てゞはなく、手紙その物の内容に依つて、甚くキリーラ・ペツローウイツチを立腹さした。

『何爲る事だ！』ツロエクーロフは跣足で寢床を飛び出て叫んだ。『謝罪を以

て私の下僕を送遣すだつて！　全體何と心得た沙汰だい？それに、彼奴は何人と交つてゐるかを知つてるんかい？野郎見てゐやがれ！俺の所へ來て奴泣くんだい！　此のツロエクーロフに對して何うして良いか今に教へてやらあ。』

それでも、キリーラ・ペツローウイツチは着物を着て、例の、彼の大袈裟な出立で狩獵に赴いた。併し、狩獵は失敗に終つた。終日狩廻して、たつた一匹の兎を見付けた、そして、それさへ取逃がしたのである。テントの下で野原の食事も亦失敗だつた、或は少くともキリーラ・ペツローウイツチの口には不美味かつた、で、彼は料理人を擲るやら、客達に當り散らかすやらした、そして歸途についての事、彼は自分の遊獵の凡ての行列をなして態々ヅブロフスキーの田野を通つたのであつた。

二

數日は經過した。而も二人の隣人間の憎惡は少しも薄らがなかつた。アンドレー・ガブリーロウイチツはボクローフスコエに歸らなかつた、キリーラ・ペツローウィッチは彼が居ないので退屈した。そこで、悶々の情は最も侮蔑的な言葉に表れた、それが先方の貴族達の熱心のお蔭で訂正され、補足されてヅブロフスキーの耳にまで達した。新規な形勢は和解に對する最後の望をも打消して了つた。

ヅブロフスキーが或時、自分の小さい領地を乘廻してゐた。白樺の森に近寄つて行くと、斧の音が耳に入つた、と一分間の後、樹の倒れる音が聞えた、彼は其の方へと馬を急がして行くと、其處に、彼の林で平氣で竊んでゐる所のボクローフスコエの百姓共を見附けた。彼等は彼を見て一散に駈遁げようとした。ヅブロフスキーは自分の馭者に依つて彼等の中の二人を捕へ、引縛つて自分の屋數

へ連れ歸つた。其の他、三頭の敵の馬が征服者の手に落ちた。

ヅブロフスキーは極度に激昂してゐた、是れ以前には名高い竊人であるツロエクーロフの人々は、彼等の主人と彼との近い關係と云ふものを知つてゐて、彼の領地の境に踏込んで惡戯を働くなどとは決してしなかつたものである。ヅブロフスキーは彼等が今交誼の斷絶を以て得たり賢しとしてゐるのを觀て取つた、それで彼は、戰爭理法の有ゆる理想とする所に反して、自分の捕虜を彼等が森で集めた所の樹の枝を以て懲らしめ、而して馬は働きに出し、自分自身の家畜の中に加へる事に決心した。

此の出來事の噂が早速其の日にキリーラ・ペツローウイッチに達した。彼は全く自分を忘れて憤激した。而して憤怒の第一分に於て怒は自分の凡ての家僕を擧げてキステーネフカ(彼の隣人の村の名である)へ向けて攻擊をなし、そいつを悉

く殘らず、土地まで犂覆し、その上、總ての所有物は卷上げて了つて彼の別莊へ積込まうとしかけた。さうした行動は彼には珍しくも何ともなかつた。然し、彼の考は直ぐと他の方角を取つた。重々しい足調で大廣間を前へ後へと歩廻り乍ら、見るともなしに彼が窓に目を遣ると門前に三頭立馬車の停るのを見た。小柄の男が革の帽子を被り粗羅紗の外套を着て車から下りて來て、それから、てく〳〵傍屋へ向つて支配人の所へやつて行つた。ツロエクーロフは、顧問役（郡裁判所の一陞位）のシャバーシユキンを認めて、彼を呼ぶ事を命じた。程なくしてシャバーシユキンは、はやキリーラ・ペツローウイッチの面前に立つた。そして幾度か頭をキク〳〵下げ乍ら彼からの仰付を恭しく待ち設けてゐるのであつた。

『今日は……お前の名前は何だつたけな？』とツロエクーロフは云つた『何の用で來たかね？』

『閣下、私は町に參りましたのでございます』シャバーシユキンは答へた。『そして、若しか閣下から何かの御命令はないかと存じまして、イワン・デミヤーノフの許へ訊きに寄りましたでございます。』

『ウン、非常にいい機にやつて來た……お前の名は何とか云つたつけ？私はお前に頼みがある。まあ酒でも一杯やるがえゝ、今云ふから』

斯うした親み深い應待に顧問役は心嬉しく胸を躍らした。彼は火酒を辭退して出來得る限り細心の注意を拂つてキリーラ・ペツローウイッチに聽耳を欹てたのである。

『私に一人の隣人があるんだ』とツロエクーロフは云ひ出した。『其奴はちつぽけな身代でゐて、無禮者なんだ。で私は彼奴の財産を取り上げて了ひたいと思つてゐるんだがね……お前はそれを何う考へるかね？』

『閣下、若し何か、その、證書がございましたらば……』

『馬鹿な事を云へ、お前さん、何んな證書だと云ふんだね？　それにや命令だよ、さあ、そいつがごてだぞ、何等の權利なしに財産を卷上げつちまはうと云ふんだからね。所で、待つた！此の所領は元は此方の有だつたのだ。それが、何でも、スピッィンとかに買はれて、又、後でヴブロフスキーの爺に賣られたものだ。こいつから一つ喧嘩を吹掛ける事は出來ないかね？』

『六かしい樣に存じまするが、閣下、確に此の賣渡の事は全く法律上の規定に基きましての事でございまして』

『一つ智慧を搾つて見んかい、お前さん、旨い法は無いか』

『若しか、その、例へば、閣下が何うにかして閣下の隣人より賣買契約書をお手に入れられる事が出來ますれば、詰りその效力で自分の財産を所有してゐ

るのでございますからして、さうすりや、その、勿論……』

『なる程、だつてこいつは困つたぞ、彼奴の書類は火事の折にすつかり燒けらまつたんだ』

『おゝ、何でございますか、閣下、彼の書類が燒けたと仰せらるゝので、まあ、これ以上の事がございませう、左樣でございますれば、裁判にお掛けなされませ、斷じて疑なく、御意の通り果されるでございます』

『さう思ふかい？　さあ、此通りぢや、私はお前の誠意に信賴する、私の感謝には確信していい筈ぢや』

殆ど地平まで低頭して、シャバーシュキンは退出し、其の日以來企畫された事件に全精神を傾到した、そして、彼が熱心な奔走のお蔭で、丁度二週間經つと云ふと、ヴブロフスキーは都から彼のキステーネフカ村の所有の不正なる廉で

陸軍大將ツロエクーロフより訴訟したに依つて適當なる辯明を速に上申すべしとの呼出を受取つた。

思懸けない訊問に驚いたアンドレー・ガブリーロウィッチは卽日返答として可也深い關係を畫上げた。それに彼は次の事を述べ立てたのである。曰く、キステーネフカ村は故人なる彼の父の死去に際して彼の有となりし事。曰く彼は遺產の法規に依つてそれを領有せし事。曰くツロエクーロフは其の村には何等の關係なき事。曰く彼が此の財產に對し局外より要權云々は讒言と詐僞行爲より來る事。等である。ヅブロフスキーは訴訟事件に於ては經驗を有しなかつた。彼は大抵の場合、常識の指導に任した、指導者は信賴される事が殆どなくて大方何時も不充分なものである。

此の手紙は顧問役シャバーシュキンの心に氣持よい印象を作つた。彼は第一

にヅブロフスキーが此の事件に於て殆んど理解を缺いでゐる事と、第二に、熱情的で輕率な人丈けに最も有利な狀態に導く事が容易だらうと云ふ事を觀て取つた。

アンドレー・ガブリーロウィッチは彼に向けられた訊問の事を冷靜に考へて見て、もつと詳細に答へる必要を認めた、彼は適當な用紙に十分陳述した、所が最後にはその紙が不足を告げた。

事件は長引いて來た。自分の正當である事に確信してゐるアンドレー・ガブリーロウィッチはその事に就て餘り心配をしなかつた。自分の身邊には金を播き散らかす希望も可能も有たなかつた、第一、官吏共の金で購はれる良心などと云ふものを嘲つてゐた、そして讒言の犧牲になると云ふ考はてんで頭に上らなかつた。自分の側から云ふと、ツロエクーロフは彼の企謀んだ事件の勝利に就い

てそれ丈け少く考へた譯である。シャバーシュキンは彼の名に於て行動し、裁判官を嚇すやら、買收するやら、條令を出來得る限り歪に解釋するやらして、彼の爲めに盡瘁した。兎も角も千八百何年二月九日に當つてヅブロフスキーは町の警察を通して、彼陸軍中尉ヅブロフスキーと陸軍大將ツロエクーロフ間に釀せる所領地紛擾に關する該事件の判決を聽取し、且つ、自分の滿足か不服かを書記する爲め地方の某裁判所へ出頭すべしとの招喚を受けた。卽日ヅブロフスキーは町に赴いた。途中に於てツロエクーロフが彼に追付いた。彼等は互に傲慢に眺め合つた、そしてヅブロフスキーは自分の仇の顏に底意の惡い微笑を認めた。

町に着いて、アンドレー・ガブリーロウィチは知合の商人の所に止つた、彼の許で一夜を明し、翌朝郡裁判所に出席した。誰一人彼には注意を拂はなかつ

た。彼に續いてキリーラ・ペツローウィッチが到着した。

書吏共は起立してペンを耳に挾んだ。役人共は大變な卑屈な表情を以て彼を見上げ、彼の位階、年齢、肥大に對する尊敬からして彼に肘掛椅子を進めた。彼は坐つた。アンドレー・ガブリーロウィッチは立つたまゝ壁に凭掛つた。深い沈默が取卷いた。すると書記が響渡る聲で裁判の判決を讀み始めた。

（此の處ブーシュキンは判決文を捜入せん事を豫想し、而して原文書の卷末の註には彼が適當に名前を變更して之に當てんとせし郡裁判所の判決文記されたり。）

書記が沈默すると顧問役（ガセソーテリ）は立つて、低くお辭儀をしてツロエクーロフに向ひ、提出した書面に署印する事を促した。そこで誇かな威嚴を示せるツロエクーロフは、彼からペンを取つて、判決文の終に自分の凡て滿足である事を書き付け

た。

さて、ヅブロフスキーの順番となつた。書記は彼に書類を突附けた。併し、ヅブロフスキーは頭を垂れたまゝ身動もせず立つてゐた。書記は彼に自分の催促を再び繰返した。

『一切は悉く自分の滿足である事を書くのだ、それとも、或は意外にも其方側が正當なる權利ありと良心に感じて、法規に基く期間内に何れへか然るべく控訴する意志ありとすれば其方の明な不服を記すことになる』

ヅブロフスキーは默つてゐた……俄に彼は頭を擡げた、彼の眼光は閃いた。彼は足を踏み鳴らし、素晴らしい力で書記を突飛ばした、と書記は床にぶつ倒れた。矢庭にインキ壺を取上ぐるや、そいつを顧問役にぶち投げた。ヅブロフスキーは猛惡な聲で叫んだ。

『おゝ、貴樣達は神の教會を敬はないか！失せやがれ、此の外道等！』

それからキリーラ・ペッローウィッチに對ひ乍ら、

『閣下は此の事をお聞きになりましたか』彼は續けて、『牧犬者等が神の教會に犬を引張り込んだのです！犬共が教會の中を駈つてゐる、おのれ、糞つ！何うするか見てけつかれ！』

一同の者は懼を抱いた、番人共は物音を聞きつけて駈込み、辛うじて彼を取押へた。それから、彼を引いて行つて橇に乘せた。彼に續いてツロエクーロフは總ての裁判官共に同伴されて出た。

意外なヅブロフスキーの亂心が彼の想像の上に甚大な效驗をなし、彼の尊嚴を甚く傷つけた。彼の感謝に望を掛けてゐた裁判官共は彼から一言の挨拶の語さへも賜ることが出來なかつた。彼は直ぐにボクローフスコエにと赴いた。私

に良心の苛責に捕はれだして來て、自分の憎んでゐる者に打勝つた事に依つて全く滿足する事は出來なかつた。ヅブロフスキーは其の間寢臺に横つてゐた。郡の醫者は（幸ひ全くの無學者ではない）血を取出し、蛭を吸付かし、それから、芝菁硬膏（フラハンノウ）を塗つた。夕方には彼は少し輕快になつた、そして翌日にはキステーネフカに連れ歸られた。その村は始ど最早彼に屬してないのである。

三

時日は若干經過した。ところで、哀れなヅブロフスキーの健康は未だ全く良好を示さなかつた。確に、狂氣の發作はもはや再發しなかつたが、彼の元氣は著しく衰へてゐた。彼は自分の前にしてゐた仕事を忘れた、そして自分の部室からは殆ど出る事がなくて、終日終夜考に耽つてゐた。善良な老婆であり、何時かは彼

を我が子の如にして世話して呉れたエゴーロヴナは今は彼の傅婢ともなつた。彼女は彼を赤子の如に色々と世話し、食事にも睡眠にもその時を彼に思出させ、彼に食物の世話をしてやり、寢床を整へなどしてやつた。アンドレー・ガブリーロウイッチは彼女に服從した、そして彼女以外には誰とも交渉を持たなかつた。彼は自分の仕事なり、家事上の處理に就いて考へるやうな狀態にゐなかつた。そこで、エゴーロヴナは總ての出來事を近衞步兵聯隊の一つに勤務してゐて、當時ペテルブルグにゐた若きヅブロフスキーに通知する必要を認めた。それ故、出費簿の紙を一枚裂取つて、彼女は、たつた一人のキステーネフカ人で讀書（よみかき）の出來る料理人のハリトンに手紙を書かした、そして、その手紙を卽日町の郵便局へと持つて行かした。

然し、今や讀者は此の物語の本當の主人公と知合になるべき時である。

ウラヂミル、ヅブロフスキーは幼年學校で教育を受け、そして近衛隊に旗頭となつて編入されてゐた。父は彼を適當な方法に於てやつて行かす爲めには何事も惜むことをしなかつた。そこで若者は當然期待して然るべきより以上に家から受取つてゐた。無頓着で、おまけに功名心のある青年だつたので、彼は贅澤な種々な道樂をする習慣に浸つてゐた。摶賭をうつ、借金をする、それで將來の事などは無頓着なもので、偶に頭を掠める事と云つたら、早晩自分は金持の花嫁を娶ることになるんだな位な事であつた。

或る晩、彼の許に數人の將校が集ひした時の事、安樂椅子に身を投げ掛けて、彼が琥珀の吸口から薫らしてゐると、彼の近侍のグリーシャが彼に手紙を手渡した。その上書と封印が直に青年を驚かした。彼は急いで開封し、次の事を讀んだ。

我々共の主君ウラヂミル・アンドレーウイッチ様、貴方様の老いたる傅婢なる妾より懼れ乍ら貴方様へ父上様の御容態に就いて申上げます。大殿様は大變にお惡くましまして、物も決して云はせられる事なく、終日、愚な子供の如に坐つてゐられます、——そして長らへ給ふ事と死はただ〳〵神様の御心にある事でございます——妾の愛慕致します若様、我々の許へ御歸り下さいませ、我々は貴方様に對してペソーチノエまで馬車を差遣せます。聞く所に依りますれば、郡裁判官は我々共の許へ我々をキリーラ・ペツローウイッチ、ツロエクーロフの配下に引渡すために來るとの事——なぜならば我々共は彼等のものとの事でございます、まあ、何うして、我々は最初から貴方様のものでございます——生れてからそんな事は聞いた事もございません。貴方様にはペテルブルグにお住ひの事故、其の事に就き天子様へ申上げる事も叶ふ事と存じます、さうすれ

ば天子様は我々共を敵にお渡しなされる事はございますまい。……云々。貴方様の忠實な、傅婦なるアリナ・エゴーロヴナ・ブズイリョーワより。

ウラヂミル・ヅブロフスキーは此等の可也馬鹿げた行(くだり)を其場で數回も異常な昂奮を以て讀下した。彼は幼年の折母を失ひ、それに、自分の父親も殆ど知らないで、生れて八つになるとペテルブルグに連行かれたのである。それにも拘らず、彼は自分の父にロマンチックに結付けられてをり、家庭の靜な樂みと云ふものを味ふ機會をほんの僅しか持つてゐなかつた所から益々家庭の生活と云ふものを戀慕つてゐた。

自分の父を失ふと云ふ考は彼の心臓を酷たらしく搔きむしつた。そして、彼が自分の傅婢の手紙に依つて推察した所の哀れな病人の狀態は彼を戰慄させた。彼は、僻遠の閑村にあつて、蒙昧な老婆や家僕共の手に取り殘されてゐて、或

る不幸には嚇かされ、それに、救助とてもなくして、肉體と精神の苦悶の中に消滅し果てゝ行く父を想像に描いた。ウラヂミルは等閑に於ける罪な自身を悔いて自らを責めた。永い間彼は父から何の通知も受取らず、それに、父は旅行でもしてゐるか、或は家政の心配などをしてゐる事だらうと考へて、彼に關しての消息を知らうとさへも思はなかつた。その日直ぐに彼は休暇の手續を始め、それから二日を經て自分の忠實なグリーシャと共に驛次の郵便馬車で旅立つたのである。

ウラヂミル・アンドレーウィッチはキステーネフカへと進路を轉換しなければならなかつた所の驛に近付いた。彼の胸は哀れなる豫感で滿されてゐた。彼は最早生きて父に逢ふ事は出來ないものと氣遣つた。彼は村に於て自分を待つてゐる悲慘な生活の有樣を心に描いた——寂寞、孤獨、貧乏、さては彼が何にも

辨へ心得のない物事の世話などと。驛に到着して、彼は管理人の所へ入つて行き、空いてゐる馬を乞うた。管理人は彼が何方へ行きたいのかと尋ね、そこで、彼に、キステーネフカから遣はされた馬が最早彼を四日四晩も待つてゐたと云ふ事を話した。直ぐウラヂミル・アンドレーウイッチの所へ老いた馭者のアントンが出て來た。その男は嘗てはよく彼を厩に連行つた事があり、又彼の小さい馬を監督してゐた事もあつた。アントンは彼を見て涙を流した、彼に地まで頭を下げて、年老いた旦那のまだ存命である事を語り、それから馬車の支度にと走つた。ウラヂミル・アンドレーウイッチは差出された朝飯を辭退して、出發を急いだ。アントンは彼を導いて村間の道を辿つた。そして彼等の間には話が取交された。

『さあ、話して呉れ給へね、アントン、俺の親父とツロエクーロフの間に何

んな事が起つたんだね?』

『まあ、途方もねえ事でごでえますよ、ウラヂミル・アンドレーウイッチ様。旦那様、何でも、その、キリーラ・ペツローウィッチと仲の合はねえ事がごでえましたよ、ところが奴裁判にかけましてな——その癖彼奴自身がちよい〳〵裁判官をしてた者でごでえますが、旦那様方のお考を彼此と申しますのは我々奴僕共の致す事ではごでえませぬが、確に、大旦那様はキリーラ・ペツローウィッチに對して詰らん事をなされましたよ、齒向ひさへしなければ何もなかつたでごでえますがな。』

『ぢや、此のキリーラ・ペツローウィッチはお前さん方を何んなにでも好いた目に遇すんだね?』

『左様でごでえますとも、旦那様、顧問役など彼の前では三文の値打程にも

注意せられませんで、警察署長は彼の爲めに走廻つてゐると云ふ次第でごでえまして。貴族様方は皆彼の許へ尊敬を拂ひに參りますそうで。諺にも食槽(コルイト)のある所に豚がをるとは旨く云つたものでごでえますよ』

『本當かい、彼の男が此方の所有地を取上げるとか云ふ事は?』

『おゝ、旦那様、我々共も左様聞いてゐるでごでえます。先達つてポクローフスコエの寺の小役僧が我々の村長さん方の洗禮式の席で云ひます事には、

『貴方々は思ふ存分遊び樂んで置かれるがよござんす、今に、それ、キリーラ、ペツローウイッチの手に渡されて了へばさうは出來ませんからな。』でごでえまするとと、すると鍛冶屋のミキタが彼に斯う云ひましたでごでえますよ、』

『澤山です、サヴエリイチ、我々の敎父さんを悲めないで下さい、そしてお客さん達を苦めたりなんか。キリーラ・ペツローウイッチはキリーラ・ペツローウ

イッチ丈けのもの、又アンドレー・ガブリーロウイッチ様もその通りです。だが、我々はみんな神様と天子様のものである譯ですから』つて。なあ、それ、他人(ひと)の口つてものは塞ぐ理に行きませんでごでえますで。』

『すると、お前達はツロエクーロフの領地に移つて行くのを望んではゐないんだね?』

『キリーラ・ペツローウイッチの領地へでごでえますだつて! おゝ、飛んでもねえ! 彼は自分自身の百姓共でさへむごたらしうに取扱ふでごでえます、で、他の者共が這入ると云ふ事になりますりや、それこそ、皮ばかりではない、肉まで裂取られて了うでごでえます、否、アンドレー・ガブリーロウッチ様は何時までもお達者で遊ばさねばなりません、若し神様が彼の方をお召しなされたなら、我々は貴方様の外に誰を賴る氣がごでえませう、おゝ、我々の恩人様、我

々共を見捨てなさいますな、我々共は最早貴方様のお味方でございます」

此等の語と共に、アントンは笞を振廻し、手綱をかい繰つた。そこで馬は愈々一目散に驅け出した。

年老いたる馭者の忠實に感動さられたヅブロフスキーは默つて、たゞ自分の冥想に耽つてゐた。一時間以上も經つた、俄にグリーシャの「それ、ボクローフスコエでございます！」と云つた叫聲に彼は呼醒された。ヅブロフスキーは頭を擡げた。彼は廣い〳〵湖の岸を通つて行く所であつた。その湖水からは河が流出て、ずつと遠方まで伸び、丘陵の間を曲り曲つて見えた。それ等の丘の一つの上で繁つた綠の森の上には綠の屋根や、大きな石造家屋の觀樓（ベリヅヘデール）が聳えてあり、他の上には、五列の圓屋根の寺院や古の鐘樓なども見え、邊りには菜園や井戸などのある村の家々が散らばつてゐた。ヅブロフスキーは此等の場

所に見覺えがあつた。彼は、此の丘の上でツロエクーロフの小さいマーシャと遊んだ事のあるのを想出した。彼女は彼より二歳程年下で、その時分既に美人となる事が豫想されてゐたのであつた。彼は彼女の事に就いてアントンに訊いて見たいと思つた。併し、何だか氣まり惡さがそれをさせなかつた。

城に近づいて、彼は庭園の樹木の間にちら〳〵する白衣を見つけた。その瞬間アントンは馬に鞭を當てた、そして、普通の馭者と同樣、田舍の馭者共には極めて有勝ちな、一種の虛榮心に驅られ、一氣に速力を出して橋を渡り、庭園を横（よぎ）つた。村を出て、彼等は小山の上に登つた。

そこで、ウラヂミルは白樺の森を望んだ。又左手に當つて、廣々とした所には屋根の赤い灰色の小さい家が見えた。彼の胸は激しく動悸打つた。眼前にはキステーネフカと哀れな彼の父の家とがあつたのである。

約そ十分も經つと、彼は己が屋敷に着いた。彼は云ひ表すことの出來ない感動と共に自分の周圍を眺めた。十二年間彼は自分の故郷を見なかつた。彼が宅に居た時分、塀の周りにまだ植えられたばかりだつた小さい白樺は成長して、今では高い、枝の茂つてゐる樹となつてゐた。嘗ては規則正しく作られた三つの花壇で飾られてゐて、その間に注意深く箒をあてられてゐる廣い道が通つてゐた庭は鎌も當てられないまゝの蓬々たる草原と變り果てゝ、其處には繫がれた馬が牧はれてゐた。犬が吠えかゝつた、然し、アントンを見たので、默つて、毛深い尾を振り出した。家僕共は僕婢房から走出て騷動しい歡喜を浴せかけ乍ら若い旦那を取卷いた。熱心なる人群の間を彼は辛じて切拔けて、古びた段階へと駈けた。玄關の所でエゴーロヴナが彼に逢つた。彼女は泣き乍ら自分の養ひ子をかい抱いた。

『ご氣嫌よう、ご氣嫌よう、をばさん。』善良な老婆の胸に身を押しつけ乍ら、彼は繰返し云つた。『ね、親父は何うしてゐるの？何處にゐるの？何んな具合？』此の瞬間に部屋の中へ、丈の高い眞蒼の顏をした痩せ衰へた老人が部屋着のまゝ、夜帽を被つて、一歩々々難儀さうに足を運んで入つて來た。

『何處だヴォロヂカは？』と彼は弱々しい聲で云つた。ウラヂミルは熱情を以て自分の父をかい抱いた。歡喜は病人にあまりの强い激動を與へた。彼は弱つて、足は曲つた、そして、若しも息子が彼を支へなかつたならば倒れる所だつた。

『何うして貴方は床をお起き遊ばしましたの？』とエゴーロヴナは彼に云つた。『足は立たないのですのよ、それにまあ、皆のゐる所へ行かうとなされるなんて。』

老人は寢室に連行かれた。彼は息子と話をしようと力めた、然し、考は彼の頭の中で混亂して、その言葉には少しも連絡がなかつた。彼が默つたと思ふと、すや〳〵と睡に落ちた。ウラヂミルは彼の容態に驚かされた。彼は父の寢室に席を占め、そこで、父と二人きりを殘して呉れるやうに乞うた。家仕の者共はその云ふ通りにした、そこで皆の者はグリーシャの所へ押寄せて彼を僕婢房へ連込んだ、一同は、彼を問ふやら語るやら、挨拶するやらで困らし乍ら、田舍式に出來得る限りの慇懃を盡して饗應した。

四

自分の到着以來數日が經過すると、若いヅブロフスキーは仕事に取掛らうと思つた。

然し彼の父は必要な說明を彼に與へる樣な狀態にはゐなかつた。アンドレー、ガブリーロウイッチは打任せの出來る人を持つてゐなかつた。書類を檢べて見て、彼は顧問役から來た最初の手紙と、それに對する返答の草稿だけを見つけた。この物からでは彼は訴訟に關して明な了解を得る事は出來なかつた。それで此の事件の正當を望み乍ら、結果を待つ事に決心した。

その間にアンドレー、ガブリーロウイッチの健康は時々刻々惡化して來た。ウラヂミルは彼の最期が近づいた事を豫見した。そして、全く小兒になつて了つてゐる老人から離れて行かなかつた。

その間に制規の期間と云ふものは過ぎて了つた。そして控訴はされなかつた。キステーネフカはツロエクーロフの所屬となつた。シャバーシュキンは彼の許へ挨拶と祝儀にやつて來た。そして、何時閣下には新得の財產を領有せられる

意志であるか、御自身で行つてさうされるか、或は誰かに代理を委任されるかを訊いた。キリーラ・ペツローウイツチは顏を顰めた。生來彼は貪慾者ではなかつた。復讐の望が餘りに遠くまで彼を引摺り込んだのであつた。彼の良心は苛責を覺えた。彼は自分の若い時代の僚友である對手が何んな狀態に陷つてゐるかを知つてゐた。そして勝利は彼の心を決して喜ばせなかつた。彼はシャバーシュキンを嚴しく凝視した。而して彼を叱飛ばす爲めに何かよい理由を求めようとして見たが、その爲めの適當な口實が見つけ出せないで、頭到怒鳴り附けた。

『失せろ！貴樣に用はない！』

これは仲々穩かならずと見て取つたシャバーシュキンは急いでその場を去つた。

後に一人殘つたキリーラ・ペツローウイツチは「勝鬨天地に轟きぬ」と口笛を吹

鳴らしつゝ前へ後へと歩廻つた。それは何時もながら彼の心の異常な波立を示すものであつた。

遂に彼は低い四輪車を自分の爲めに支度する事を命じ、もつと暖く着物を着（時は既に九月の末であつた）、自分自身で馭し乍ら屋敷を乘出した。

間もなくアンドレー・ガブリーロウイツチの小さい家が見えて來た。相反してゐる感情が彼の精神を一杯に滿した。滿足させられた復讐や權勢に對する愛などゝ云ふものがより崇高な感情を或る程度まで萎縮さして了つた。が結局後者が勝利を占めた。彼は自分の元の隣人と和睦し、爭の跡を消滅し、彼の財產は彼の有に歸さうと決心した。此の善良な考で胸を輕くして、キリーラ・ペツローウイツチは自分の隣人の別莊へと驀地に馬を進めた。そして直ぐに屋敷へ乘込んだ。

此の時病人は寢室の窓際に腰を掛けてゐた。彼はキリーラ・ペッローウイッチを認めた、すると彼の顏には恐しい混亂が描出された。濃紫色を帶びた紅が何時もの蒼白い個所に顯れて來、それから眼は閃き、彼は不明瞭な譯の分らぬ音聲を出した。其處に腰を下して、出納簿を檢べてゐた彼の息子は頭を擡げて見て、彼の變つた樣子にびつくりした。病人は恐怖と瞋恚の表情を以て外を指した。此の瞬間、聲が響き渡り、エゴーロヴナの重々しい足音が聞えて來た。

『旦那樣、旦那樣！キリーラ・ペッローウイッチが來ました、キリーラ・ペッローウイッチが階段の所に！』

エゴーロヴナは嘆息した。

『おや、まあ！何うした事でせう！彼の人は、まあ、何うしたつてんでせう？』

彼は愴惶しく自分の部室着の裾をかいつまんで、肱掛椅子から立たうとしか

けた。少し立上つて、俄にばつたり倒れた。息子は彼の許へ飛んで行つた。老人は無感覺で、氣絕して横つてゐた。痲痺が彼を襲うたのである。

『大至急だ、町へ行つて來い、大至急醫者を呼んで來るんだ！』とウラヂミルは叫んだ。

『キリーラ・ペッローウイッチが尋ねて參りました。』這入つて來た下男が云つた。ウラヂミルは彼に恐しい視線を投げかけた。

『キリーラ・ペッローウィッチに、直ぐ出て行けつて云へ、グヅ〳〵してたら追ひ出されるぞつて……行け！』

下男は自分の主人の命令を遂行する爲めに喜んで走つた。エゴーロヴナは手をパチッと鳴らした。

『まあ、貴方樣つたら』彼女はピーク〳〵云ふ聲で云つた。『貴方樣は御自分の

お頭をお失ひなされますの！キリーラ・ペツローウイッチは我々共を食ひ盡しますよ』

『お默りなさい、婆や。』とウラヂミルは怒つて云つた。『直ぐにアントンを町へ醫者を呼びにお遣り』エゴーロヴナは出て行つた。

玄關の間には誰もゐなかつた。凡ての家僕共はキリーラ・ペツローウイッチを見に外へ走出たのであつた。彼女は階段の上へ出て行き、其處で若い旦那からの返答を下男が傳へるのを聞いた。キリーラ・ペツローウイッチはヅロージュキに坐つてゐて彼の言ふ事を聞いた。彼の顏は夜よりも尙ほ暗くなつた。彼は侮蔑を籠めた微笑を漏らした。嚴しい眼付で家僕を睨返した。それから、ほつくゝと屋敷を出て行つた。彼はアンドレー・ガブリーロウィッチが一分間前に坐してゐた窓をも眺めたのであつた、併し、最早其處には彼は居なかつた。傳婢

は主人の吩咐を忘れて階段の上に立つてゐた。家僕共は此の出來事に就いて騷動しく語らひ合つた。俄にラウヂミルは彼等の間に立現れて、斷々に云ひ出した『醫者は呼ばなくてもよい、――私の親父は死んで了つた』

混雜が卷起つた。家僕等は舊い主人の部屋に駈込んだ。彼はウラヂミルが彼を移し運んだ肱掛椅子に横つてゐた。彼の右手は床までぶら下つてをり、頭は胸に垂れてゐた――此の體には最早活きてゐると思はれる兆候は少しもなかつた、未だ冷たくはなかつたが、はや、樣變りのした死相が有り〳〵と見えてゐた。エゴーロヴナは大聲を立てゝ泣いた。家僕共は死骸のぐるりを取卷いた、――そこで、彼等はそれを湯灌するやら、それから、千七百九十七年に仕立てた正服を着せるやらした、それが濟むと、彼は卓子の上に戴せられた。その卓子には彼等がその時まで長々の年月を彼等の主人に仕へ通したのであつた。

五

葬儀は三日目に行はれた。哀れな老人の體は經帷子に包まれ、蠟燭の火に取圍まれて卓子の上に横つてゐた。食堂は死體を舁出す用意をしてゐる家僕共で一杯になつてゐた。ウラヂミルと下男共が棺を持上げた。僧侶が前へと進み出せば、伴僧達は弔の祈を唱へつゝ彼に陪縱した。キステーネフカの主人は今を最後に我が家の閾を越した。棺は森へと運ばれた——教會は森の彼方にあつた。その日は晴れた、寒い日であつた。そして秋の葉は樹から散落ちてゐた。森の出口に來ると、そこからは、古い菩提樹に蔭されてゐるキステーネフカの木造の教會と墓場とが見えてゐた。彼方にはウラヂミルの母の體が安らかに眠つてゐた。彼方には、彼女の墓の傍に、新しい穴がその前日に掘られてあつたので

ある。教會は自分等の主人に最後の禮拜を捧げようとして來たキステーネフカの百姓共で一杯になつてゐた。若いゾブロフスキーは唱歌所の方に立つた。彼は泣きもせず祈る事もしなかつた。然し彼の顏は凄かつた。悲しい儀式は終つた。ウラヂミルは一番先に父の死骸に別れを告げに行つた、彼の後に總ての家僕共も從つた、蓋が運んで來られて、棺が釘附された。女達は大聲を立てゝ泣いた。百姓共は拳を以て屢々涙を拭つた。ウラヂミルと三人の下男は凡ての村民共に伴はれてその棺を墓場へ運んだ、棺は穴に入れられた、——居合せた一同の者共は一攫宛の砂を墓穴へ投げ込んだ、——墓穴は埋り、人々はお禮をして、それから退散した、ウラヂミルは急いで退去し皆の者共を追越して、それから、キステーネフカの森に姿を沒して了つた。

エゴーロヴナは彼の名に於て祭司と教會の衆僧達を葬儀の馳走に招待し、若

い主人はその場には出席しない考でゐる事を知せた。かくて祭司のアニシムとその妻のフエドートヴナと小役僧達とはエゴーロヴナと故人の美徳や怎んな運命が彼の相續人を待構へてゐるかと云ふ事などを語らひ合ひ乍ら、歩いて貴族の屋敷へと赴いた。

（ツロエクーロフの訪問と彼が何んなあしらひを受けたかと云ふ事は、もはや近所一般に知れ渡つてゐた、そして地方の政治家共はその事から重大な結果を豫言してゐた。）

『何と云つたつて物は成る様に成るんですわ』祭司の妻が云つた。『併し、若しもウラヂミル・アンドレーウィッチさんが私等の御主様にお成りなさらないならば殘念ですわ。彼の方は全く立派な若様でございますもの、申分の無い。』

『それぢや誰でございますの、私等の御主人様になるのは、若し彼の方であり

ませんでしたなら？』エゴーロヴナは遮つた。『キリーラ・ペツローウィッチが幾ら憤つたつて駄目ですよ、——卑怯者を取つ掴へたんぢやありますまいし、若旦那様は御自分で爲さる丈けのことは爲さいますわ、だつて、神様がお助けなさいますもの——善行が決して彼の人を捨てゝ置くやうな事はありませんよ。まあ、キリーラ・ペツローウィッチも己惚が強いつても程があるわ！併し、いゝ氣味だつたこと！宅のグリーシュカが彼に怒鳴りつけちやつた時には、尾を卷いて行つちやつたわ。『去せろ、老毫犬奴！屋敷を出ろ！』つて。

『おゝ、エゴーロヴナ』小役僧が云つた。『だつて、まあ、グリゴーリーによくもそれだけの舌が動かされたですね？私なんかは多分、キリーラ・ペツローウィッチを横目で見る事よりか、私を教主さんにして下さいと云出す方がまだ餘つ程容易でせうね、彼の人を見でもしようものなら、それこそ、恐くつて、ぶ

るぶるしますよ！そして背中は自と、かう前へと曲つて了ひますよ！』

『みんな空な儚い事です！』と祭司の云ふ事には『キリーラ・ペツローウィッチにだつて、何時かは今日のアンドレー・ガブリーロウィッチと同様に弔の曲を奏する日は來るのです。ただ、葬儀がもつと盛大であり、それから、客はもつと澤山招待でせうがね。然し神様に取つては同じ事ではありませんか？』

『まあ、和尚様！私達だつて近所の人を皆んなお招きしたいと思ひましたわ、だつて、ウラヂミル・アンドレーウィッチ様が御贊成なさらなんだのですもの。でも御安心なさいませ、我々共には皆様達をお饗應する物は十分ございますから！……何を御所望なさいますの？結局、皆さん方が澤山ございませんでしたら、私達は大切なお客様の貴方様方を叮嚀にお饗應が出來ますわ』

此の親切な約束と、甘いピローグに有りつかうとする希望とは話相手共の足

を速めた、そして彼等が無事に貴族の邸に到着すると、其處では食卓は最早整へてあり、火酒も載せられてあつた。

その間にウラヂミルは精神の憂愁を運動や疲勞する事に伝つて打消さうと力めつゝ森の中へ深く分入つた。彼は少しも道を撰ばずに進んだ。それで枝は屢々彼を撥き打つたり、引掻いたりした、又足は時々沼地の泥中に踏込んだりした——彼は何にも心付かなかつたのである。遂に彼は小さい谷に達した。それは何方からも林に取圍まれてをり、秋に半裸にされて了つた樹々の間を溪流が靜に曲蜿つてゐた。ウラヂミルは立停つて、冷い芝生の上に腰を下した。すると、一層暗い考が後から／＼と湧いて來て彼の精神に押逼つた……彼は自分の孤獨を痛切に感じた、そして自分に取つての將來は暗澹たる雲に塞されたものとなつて顯れた。ツロエクーロフとの敵對は彼に新しい不幸を豫言した。貧しい彼

の財産は他人の手に移つて行く、と、かゝる場合を思へば、只赤貧が彼を待ち構へてゐるのみであつた。彼は、數枚の萎れた葉を運んで行く溪流の靜な流に見入つたまゝ、其處に身動もせず長い間坐つてゐた。すると、生の類似と云ふものがそのうちに瞭然と見出されて來た――確な、全く有りふれたる所の類似と云ふものが。遂に彼は薄暗くなつた事に氣がついたので、立上つて、それから歸路を探し歩いた。然し、彼は、我が家の門へ眞直に通じてゐる狹路へ出るまでは、それからまだ長い間見知らぬ林の中を彷徨ひ歩いた。

不意に、伴僧共を引連れてゐた祭司がヅブロフスキーに出會した。不幸な前兆だ、と云ふ考が彼の頭に生じた。彼は自然、一方に避けて了つて、樹々の間に身を匿した。彼等は彼を認めなかつたのでお互同士熱心に語らひ合つてゐた。

『惡を離れて善事を爲すべしだ』祭司が自分の妻に云つてゐた。『我々は玆

に心配する事は何にもないさ、事件は何う片がついた所で我々の不幸になる譯でもないからね』

祭司の妻は何か云つたがウラヂミルはそれを聽取る事が出來なかつた。

家に近づいて來て、彼は澤山の人々が居るのを見た、百姓共や家僕共は貴族の屋敷に群集つてゐた。近づかぬ前からウラヂミルは平常にない騷動しさや話聲を耳にした。小舍の傍には二臺の三頭立馬車が置いてあつた。階段の上ではフロックの正服を着た數人の見知らぬ者共が何か談し合つてゐる樣子であつた。

『何事だい、これは?』彼は、自分の所へ會ひに走つて來たアントンにぶん〳〵して訊いた。

『此奴等は何者だ、一體何の用があるんだい?』

『おゝ旦那様、ウラヂミル・アンドレーウィッチ様』老人は喘き乍ら答へた『裁判官が參りました。我々共をツロエクーロフに引渡すのでございます、貴方様の御慈愛から我々共を引離さうとしてゐるのでございます！……』

ウラヂミルは項を垂れた。彼の婢僕共は不幸な自分の主人を取巻いた。

『我々の父君様』彼の手に接吻し乍ら、彼等は叫んだ『我々共は貴方様以外には他の旦那は入りません。何うぞ御命令なさいませ、御主人様、裁判官共は我々が好い様に致しませう、おゝ、我々共は死ぬるのを厭ひません、併し決して貴方様は引渡しません』

ウラヂミルは彼等を見た、すると、暗い感情は彼の胸に波を打つた。

『大人しくして呉れろ』彼が云つた『ぢや私が官吏達と談し合つて見よう』

『それがようございます、談して下さいませ、旦那様』群集の中から彼に叫

掛けた『そしてあの忌々しい奴等を悔悟さしておやりなさいませ』

ウラヂミルは役人の許へ近づいて行つた。シャバーシユキンは頭に正帽を戴き腰に手を置き、自分の周圍を傲慢な眼付で見廻し乍ら突立つてゐた。背丈の高い、ぼつてりと肥太つてゐる男で、歳は五十ばかり、赤顔に髭を生してゐる警察署長は近づいて來るヅブロフスキーを見て咳嗽一番、嗄聲で發音して申さく

『ぢやに依つて、本官は、既に云つた事を其の方に繰返して云ふ、郡裁判所の判決に依り今日より其の方共はキリーラ・ペツローウィッチ・ツロエクーロフに屬するものである、そして、その代理の方が此處に出席される所のシャバーシユキン氏である。其方共は凡て彼の方の命令に服從するのぢや。そしてお前方女達は彼の方を愛し敬ふがよい、彼の方は仲々お前方をお好きの様ぢや』

此の鋭い冗談と共に警察署長は笑ひ出した。シャバーシユキンと餘の官吏共

も彼に續いて笑つた。ウラヂミルは憤懣の情に燃上つた。

『お詞ひしますが、これは全體何う云ふ譯ですか？』彼は愉快さうにしてゐる警察署長に僞の冷靜を裝うて尋ねた。

『此は斯う云ふ譯だ』機智のある官吏は答へた『即ちさ、我々は此の領地にキリーラ・ペツローウィッチ・ツロエクーロフを入れることにし、それから、別物の他の人には無事に大人しうさつさと出て行つて貰ふ爲めにやつて來たと云ふ譯だ』

『然し諸君は、僕の宅の百姓共よりも先づ第一に私の許へ知らせ、又其筋の決定だつたら領主へ通告が出來た筈だと思ひますがね……』

『元の領主のアンドレー・ガブリーロウィッチ・ヅブロフスキーは神様の御心に從つて死んでゐるさ、が君は一體何者だね？』

シャバーシュキンは傲慢な形相で云つた『我々は君を知らない、知りたくも思つてないさ』

『お官吏様、彼の方は我々共の若旦那様でございます』群集の中からさう云ふ聲が聞えた『ウラヂミル・アンドレーウィッチ様でございます』

『何奴だ、其處で口を開いた奴は？』獰猛な顏付で警察署長が云つた『貴様達の旦那はキリーラ・ペツローウイッチ・ツロエクーロフ様だ、……聞えたか、馬鹿野郎共？』

『呆れらあ！』ある聲が云つた。

『おゝこいつは謀叛だ！』警察署長は怒鳴つた。

『おい、村長、これべ出た！』

村長は前へ進み出た。

『直ぐに搜し出せ、何奴が大膽にも俺に口を利いたんだ、彼奴何んな目に懲らしめられる氣だ！……』

村長は人込に向つて、誰が云つたかを訊いた。併し皆默つてゐた。間もなく、後の方の列に於て怨謗の聲が起つた。と直ぐに大きくなつて來、一分間にして恐しい叫聲と變つた。警察署長は聲を細うし、彼等を諫めやうと欲した…

『おい、何で彼奴を默つて見てゐるのだ』、家僕共が怒鳴つた『皆の衆、彼奴等をやつ付けろ！』そこで群集は動搖めき出した。シャバーシュキンと官吏共は急いで玄關に飛込み、自分の後に扉を閉めた。

『若い衆、ひつ捕へろ！』同じ聲が怒鳴つた、そこで群集は雪垂れ掛つた。

『控へろ』ヅブロフスキーが叫んだ『馬鹿者共！これは何事だい、お前達！

お前達は、自分をも、私をも亡して了ふのだ。皆家へ歸れ、そして私を一人で殘して置け。心配に及ぶな、陛下は御慈愛深くゐらせられる。私は陛下にお願ひしよう——陛下は決して我々に恥をおかゝせになるやうな事はないのだ——我々はみんな陛下の子供だ。けれどもだ、若しお前達が一揆を起したり、追剝をやつたりする樣な事があつたら何うして陛下はお前達にお庇ひ下されるものか？』

若いヅブロフスキーの說敎と、彼の響渡る聲と、雄々しい姿とは望ましい效果を生んだ。人々は靜まり、散々に去つた。屋敷は空になり、官吏共は家の中に腰を下してゐた。ウラヂミルは悲しく階段の上へと足を運んだ。シャバーシュキンは扉を開き、叮嚀にお辭儀して、ヅブロフスキーに對し、彼の親切な庇護を感謝し始めた。

ウラヂミルは侮蔑の情を以て彼を聞いてゐる丈けで何も答へなかつた。

『我々は決心しました』顧問役は續けた『貴方の許可を經て我々は今晩此處に留つて一夜を明さうと思つてゐます、最早暗くもなりましたし、貴方の百姓共が途中で襲撃する事も氣遣はれますで、何うかお願ひですが、我々の爲めに、干草でもいゝから客間へ敷くやうに命じて呉れませんか、夜が明けると、我々は自分の宅へ出發します』

『好いた様にしなさい、』ヅブロフスキーは乾き切つた聲で彼に答へた『私は最早此處では主人ではありません』

此等の言葉と共に彼は父の部室の中へと去り、彼の後に扉を閉めた。

六

『これで、萬事お終ひだ！』ウラヂミルは獨語いた。『未だ今朝は住家とパンの片とを私は持つてゐた、明日は自分の生れた家を殘して行かなければならないのだ。私の父も、父の安らかに眠る土地もあの憎い〳〵奴に屬するのだ、彼の死と私の貧苦に祟つた奴に！……』

ウラヂミルは齒を喰縛つた、而して彼の眼は瞬きもせず、彼の母の肖像の上に留つた。畫家は、彼女が欄干の上に肘で凭れてをり、白の朝衣を着て、頭髪に一輪の薔薇を挿してゐる所を描出してゐた。

『此の肖像まで我が家の敵手に落ちて了ふのだ、——ウラヂミルは考へたのである——それは折れ毀れてゐる椅子など〳〵共に物置部室の中へ投込まれるか、或は玄關の間に掲げられて、嘲笑の的となり、彼の牧犬者共の目先に曝される事であらう。そして彼女の寢室には、父の死んだ部室には彼の支配人が移

住むか、彼の婦人室に占用せられるのだ。否、否！彼が俺を追出す所の悲しい家を彼に得せしめてなるものか』ウラヂミルは齒を喰縛つた。恐しい考が彼の心に起つた。官吏(やくにん)共の聲は彼まで達した。彼等は用を吩咐けてゐて、やれ、これを何うせよの、あれを持つて來いの、又あれも要るだのとやつてゐた、それで彼は自分の悲しい〳〵冥想の中を一層不愉快に搔廻された。遂に總てが靜穩になつた。

ウラヂミルは簞笥や箱を開いて、故人の書類を取出して調べ始めた。それは大部分が色々な事柄に關聯した貸借の記取(つけとり)とか手紙等からなつてゐた。ウラヂミルは、讀まないで、それを引裂いた。その中で『我が妻よりの書翰』と表記されてある束包が見付かつた。强い感動を以てウラヂミルはそれに取掛つた。それ等は土耳古征役の時に書かれたもので、キステーネフカから軍隊に宛てゝ送

つたものであつた。彼女は良人に自分の淋しい生活や家政上の事を認め、優しい心持で別離を託ち、只管彼の歸宅を、善良な夫の抱擁に入る事を祈つてゐた。それ等の中の一つに於て彼女は夫に小さいウラヂミルの健康に就いての不安を打明けてゐた。も一つの手紙には、彼の早く啓けた才知を喜んで、彼の爲めに幸福な、輝かしい將來を豫言してゐた。ウラヂミルは熱心に讀んで、世の中の凡ても忘れて了つて、家庭の幸福と云ふものゝ世界に魂を沒入させてゐた。で時間の經つたのに氣が付かなかつた。壁に掛つてゐた時計は十一時を打つた。ウラヂミルは手紙を袋(ポケット)に入れ、蠟燭を携へて、書齋を出た。大廣間には官吏共が床の上に寢そべつてゐた。食卓の上には彼等が飲干したグラスが乘つかつてをり、そしてラム酒の强い香が部室中一杯に滲渡つてゐた。ウラヂミルは嫌惡に驅られ、彼等の側を通つて玄關の間に行つた。其處は眞暗であつた。

誰か火を見つけて隅の方へ逃込んだ。蠟燭を以て彼に向つて見て、ウラヂミルは鍛冶屋のアルヒープを認めた。

『お前何うして此處にゐるんだい?』彼は驚いて尋ねた。

『私は、その、何んしたいと思ひまして……皆の奴等が家の中に居るか何うか、それを、その、見屆けたいと思ひまして來たのでございます』聲低くアルヒープは口訥り乍ら答へた。

『で、お前は斧を何の爲めに提げてゐるんだ?』

『手斧を何うするんだつて仰せられるんでございますか?だつて、まあ、何うして今時手斧でもなしに歩けるものでございますか?あの官吏の外道等つたら、御覽じい、本當にけしからん奴等でございますでな!……』

『貴樣は醉拂つてるんだな、斧を捨てろ、歸つて寢ないか』

『醉つ拂つてるでございますだつて、旦那樣、ウラヂミル・アンドレーウィッチ樣、神樣が御證人でございます、一滴だつて口につけてゐません……それに、酒を飲むなどゝ考へてる段ではございません。御承知でございませうな?官吏共は我々を手に入れて了はうと企謀んでゐますぞ、官吏共は我々の御主人樣をお邸から追拂ふでございますぞ……えゝあの野郎共斧をかいてゐやがらあ、忌々しい奴等だ、片つ端から、一遍にやつ付けて了つて、水ん中へぶち込んでやりたいな』

ヅブロフスキーは顏を顰めた。

『まあ聽け、アルヒープ』彼は一寸默した後口を切つた『お前の企畫(かんがへ)は止せ、それは官吏共の罪ではないのだ。手燭を點けて呉れ、それから私の後へ隨いて來い。』

アルヒープは主人の手から蠟燭を取り、暖爐(ペーチカ)の蔭から手燭を探出して、それに火を點(とも)した。そして二人は靜に階段を下り、屋敷の邊に足を進めた。番人が鑄鐵の板を打ち始めた、で、犬が吠え出した。

『番をしてゐるのは誰だ?』ゾブロフスキーが尋ねた。

『我々共でございます、旦那様』細い聲が答へた『ヴァシリサとルケーリヤでございます』

『宅へ歸れ』ゾブロフスキーは彼等に云つた『お前達がゐる必要はない』

『休暇です』と、アルヒープは付け足した。

『有難うございます、御恩人様』婦人共は答へた、そして直ぐ家へ歸り始めた。ゾブロフスキーはもつと先まで歩いて行つた。二人の男が彼に近付いた。彼等は彼を誰何した。ゾブロフスキーはアントンとグリーシャの聲だと直ぐに

分つた。

『なぜお前達は寢ないでゐるんだね?』彼は尋ねた。

『私等(てまへ)何んかの眠つてゐるなどと云ふ段でごでえませうぞ』アントンが答へた『こんな事にならうと、まあ、誰が夢にでも考えませうものか……』

『靜に』ゾブロフスキーが遮つた『エゴーロヴナは何處にゐる?』

『お邸の中に、自分の部室にゐるでございます』とグリーシャが答へた。

『行つて、彼女(あれ)を此處へ連れて來い、それから皆の者を官吏等の外には一人も殘らんやうに家から連出して來い、所でお前は、アントン箱車(テレーガ)に馬をちやんとつけて呉れ』

グリーシャは去つた。程なく彼は自分の母を伴つて現れた。老婆は此の夜、着物を脱いでゐなかつた。官吏共の他には、皆の中で誰も眼を閉ぢた者はなか

つた。

『みんな此處に居るか?』ヅブロフスキーが尋ねた『誰も家に殘つてはゐなかつたか?』

『誰もゐません、書記の奴等丈です』グリーシャが答へた。

『此處へ枯草か藁かを持つて來い』ヅブロフスキーが云つた。

奴僕共は厩へ走つて行き、各自に一抱宛の枯草を運んで歸つて來た。

『階段の下へ置け、かうぢや。さあ、お前達——火をつけた!』

アルヒープは手燭を開けた、ヅブロフスキーは木片に火を點けた。

『一寸待つた』彼はアルヒープに云つた『多分、急いだ拍子に私は玄關の間の扉を閉めて來たやうに思ふ。行つて、早くそれを開けて來い』

アルヒープは玄關に走つて行つた、——扉は開いてゐた。アルヒープは低い

聲でぶじ〳〵云ひながらそれを閉めて鍵をかけた、開けろだつて、途轍もねえ話だ』と、それから、ヅブロフスキーの所へ歸つた。

ヅブロフスキーは木片を近づけた。乾草は燃上つた、焰は卷上り、屋敷全體は眞紅に照された。

『あゝ!』エゴーロヴナは傷しく叫んだ『ウラヂミル・アンドレーウィッチ、貴方は何をなさいますの!』

『默りなさい!』ヅブロフスキーが云つた。『ぢや、お前方、左樣なら!私は神樣の導く所へ行かう、新しいお前達の旦那と共に幸福に暮して呉れ』

『我々共の旦那樣、恩人樣!』奴僕共は叫んだ。

『我々は死にまする——貴方樣を捨ては致しません、貴方樣と御一緒に參ります!』

馬は用意されてゐた。ヅブロフスキーはグリーシャと箱車(テレーガ)に席を占めた。アントンは馬に鞭を當てた、そして彼等は屋敷を乘出したのであつた。

一分間にして焔は家全體を圍んで了つた。床は破れ出してバラ〳〵になり、燃立つてゐる丸太は落ち始めた。赤い煙は屋根の上に綯狂つた。傷しい呻聲や、悲鳴が響き渡つた。

『助けて呉れ、助けて呉れ！』

『滅相もねえ』と意地の悪い微笑を以て火事を見つめてゐたアルヒープが云つた。

『アルヒプーシュカ』エゴーロヴナは彼に云つた、『彼等を救つてお遣り、悪黨共を、神様がお前さんに御褒美を下さるでせう！』

『途法もねえ』鍛治屋は答へた。

此の瞬間に官吏共が窓の所に現はれた。二重窓框をぶち折らうとしてゐるところであつた。

然し、屋根は此の時、ドサツと云ふ音と共と頽落ちた——そこで呻泣は靜つた。

直ぐに凡ての家僕が屋敷に群り出た。女達は叫び立てゝ自分の家財を取出しに急いだ、小僧等は火事を喜んで踊り跳ねた。火花は火の吹雪と飛散り、小屋は燒け出した。

『これでみんな旨い具合だ！』アルヒープが云つた『何とよう燃えるぢやないか、うん？多分ボクローフスコエからは美事に見えるだらうね』

此の瞬間に新しい出現者が彼の注意を惹付けた。一匹の猫がぼん〳〵燃えてゐる小舍の屋根を何方へ飛び下りてよいか間誤つき乍ら走つてゐた。四方八方

から猫は焔で取巻かれた。哀れな動物は悲しい鳴聲を立てゝ救助を呼び求めてゐた。小僧等は猫の絶望を眺めて笑三昧にあつた。

『何を笑つてやがるんだい、悪戯小僧ら』鍛冶屋は腹立たしく云つた『神様が貴様等は懼くないんだな、神様のお造りになつたものが亡びゐるのを貴様等は馬鹿者だから笑つてゐやがらあ！』

そこで燃立つてゐる屋根に梯子を立てゝ、彼は猫を救ひに攀登つた。猫は彼の意志を了解した。そこで素早い感謝の體で、彼の袖に嚙付いた。半燒の鍛冶屋は自分の分捕物を持つて下方へ下りて來た。

『ぢや、若え衆、左様なら』彼は暗い顏の家僕に向つて云つた『私には此處に何にもする事はないのです、幸福にお過しなさい、私を悪く思つてないで下さいよ』

鍛冶屋は去つた。火炎は尙暫くは後まで暴狂つてゐた、が遂に靜り、そして焔の立たぬ炭の堆積が嚇々と夜の暗黑の中に輝いてゐた。その邊を燒出されたキステーネフカの住民共はうろ〳〵と彷徨つてゐた。

七

翌日になると火事のあつた事が近所一般に知れ渡つた。皆の者は火事の事に就いて種々樣々な推測や豫想を以て談合つた。或者は葬式の時に醉つ拂つてゐたヅブロフスキーの下僕共が番人の居ない所に乘じて、家に火を付けたのだと信じ、又或者は新住處に乘込んで酩酊してゐた官吏共に罪を被せた。若干の者共は眞實を推察し、そして此の恐しい災害の張本人は憤怒と絶望とに鼓舞されたヅブロフスキー其者だと確信した。

多くの人々は、彼自身が裁判官共や、凡ての家僕共と燒死んだと信じてゐた。ツロエクーロフは其の翌日火事の場所へ馬車を驅つて來た。そして自ら結果を裁決した。そこで、警察署長と地方裁判所の顧問役と、代辨者と書記とは、恰度ウラヂミル・ヅブロフスキーや、傅婢のエゴーロヴナや、屋敷仕のグリゴーリーや、馭者のアントンや、鍛治屋のアルヒープと同樣、行衞不明と云ふ事に認められてゐた。皆の家僕共は官吏等が屋根の頽落ちた時に燒死んだ事を知らせた。彼等の燒かれた遺骸は掘り出されてあつた。婦のヴァシリサとルケーリヤは、火事の數分前に、ヅブロフスキーと鍛治屋のアルヒープを見たと云つた。鍛治屋のアルヒープは、皆の云ふ事に依ると、生きてゐて、多分、火災の張本人が若し一人でないとしたら、その巨頭だらうとの事であつた。ヅブロフスキーの上には強い疑念が横つた。キリーラ・ペツローウイチは、出來事に

於ける凡ての顚末の詳しい記述を縣廳へ送つた。そこで新しい事件が起つた。

直樣他の知らせは好奇心と噂に新しい他の糧を與へた。追剝が現れて、恐怖が近所全般に擴つた。政府で彼等に對して取つた所の方策は不充分である事が知れた。段々著しい强奪が引きも切らず續々と行はれた。道路に於ても、村にゐても、物騷で仕方がなくなつた。追剝共が一杯乘込んでゐる數臺の三頭立馬車は日中に縣下到る處走廻つて、旅人や、郵便を止める、村へ乘込んで來る、地主の家を掠める、それから、それに火を掛ける等と云ふ有樣。徒黨の巨魁は才知にして膽勇而も豪俠であるとの譽高かつたのである。彼に就いて云ふ者は孰れも神跡奇怪を口にした。ヅブロフスキーの名前は總ての人の口々に發せられた。誰も皆此の大膽な奸賊共を指揮する者は彼であつて、決して餘人でない事を信じてゐた。玆に人々に驚異された一事がある、それはツロエクーロフの所有

地、財産が宥免されてゐた事である。追剝共は、彼の物は小舍一つだつて掠めもしなければ、一臺の荷車も呼止めなかつた。自分の不斷の倨傲を以てツロエクーロフは、此の例外を彼が自分の村々に設置してゐた所の非常に優秀な警察に歸したと同樣、彼が縣下全般に普及し得た所の畏怖に歸したのであつた。最初、隣人達はツロエクーロフの高慢を嘲笑ひ、そして、孰れも、招待を受けない客がボクローフスコエを訪問し、其處で彼等が竊窃を働く事を期待してゐた。所が遂に、追剝共も彼に譯の分らぬ尊敬を拂つてゐたと云ふ事を承認する事を餘義なくされたのである。ツロエクーロフは勝誇つた、そして新しいヅブロフスキーの奪掠の報に接する毎に、縣知事や警察署長や中隊長に關する皮肉な評言を播散らした――ヅブロフスキーは常に彼等の手からまんまと逃拔けたのである。

その中にツロエクーロフの村では敎會の祭日に當る十月一日が來た。然し後に生ずる出來事の記述に着手する事より先に、我々は新しい始めての人物や、或は我々が此の物語の始めに於て只一寸ばかり書いたに過ぎなかつた面々を讀者と近付にしなければならない。

八

讀者は、多分、既に、我々がまだほんの數語を費したばかりに過ぎなかつた所のキリーラ・ペツローウィッチの娘が我々の物語の女主人公であると云ふ事を察せられたであらう。我々に依つて記述されてゐる時は彼女が十七歲の時分であつて、彼女の美しさは今を盛と咲榮えてゐたのである。父が彼女を愛する事は殆ど馬鹿かと思はせる程だつた、然し彼女を自分の思ふ儘に、自分の物とし

て取扱つて、或は最も小さい彼女の氣紛的な贅澤な望と云ふものを滿足さす事に力め、或は粗々しくし、又時々は殘酷な扱をして彼女を恐れさせたりした。彼女の愛着には確信のある彼も彼女の信頼を強ふる事は出來なかつた。彼女は自分の感情や思想を彼から匿す事が習慣になつてゐた。その譯は、それ等を何うした風に取扱ふべきものかと云ふ事を確乎と知る事が決して出來なかつた故である。彼女は同じ女の友達とてはなく、孤獨の中に成長したのである。隣人共の妻や娘達は稀にしかキリーラ・ペツローウィッチの許へ來なかつた。それも、その人達の常の會話や遊興と云ふのが男の仲間を要するので、婦人の出席する事はなかつたのである。我々の美人はキリーラ・ペツローウィッチの所で饗宴に預つてゐる客達の眞中に現れると云ふ事は殆どなかつた。大部分が十八世紀の佛蘭西の作家の文書から成つてゐる廣い、大きな圖書室は彼女の處理に委せて

あつた。『完全なる料理女』の外に何にも讀んだ事のない彼女の父は書藉の撰擇に彼女を導くことは出來なかつた。そこでマーシャは、自然の成るが儘として、有ゆる文章に手をつけて見て、小說の上に留つた。斯くの如くして彼女は、當てミミ孃の指導の下に始めた所の自分の教育を成遂げた。同孃にはキリーラ・ペツローウィッチが大の信頼と懇親を示したもので、仕舞には此の友誼の結果が餘りに明瞭になつて來て、私に彼は孃を他の所有地へ送出さなければならなくなつたのである。ミミ孃は自分の後に可也愉快な記憶を殘した。彼女は善良な娘であつて、キリーラ・ペツローウィッチの上には明にそれを示すことの出來た勢力を濫用する樣な事は決してしなかつた。それで以て、彼女は屢々彼に更へられる所の他の嬖妾(をもひもの)共から區別されてゐた。キリーラ・ペツローウィッチ自身は彼女を他の者共より一層深く愛してゐたらしいのである。そして、M-

ademoiselle　ミミの南國的容貌を想出さす所の、九歳の惡戯者の黑い眼をしてゐる少年は彼の側で養育されてゐて、彼の子息と認められてゐたのである。その癖、恰度二滴の水球の樣にキリーラ・ペツローウィッチにそつくりな多勢の跳走の子供は彼の窓の前へ飛んで來たりするけれ共、家僕の中に勘定されてゐたのである。キリーラ・ペツローウィッチは自分の小さいサーシャの爲めに佛蘭西人の教師をモスクワから手紙で呼寄せることゝした。それは今我々に依つて記述されてゐる出來事のあつた時に於てボクローフスコエに着いたのであつた。

此の教師は、自分の愉快な外貌と單純でさつぱりとした舉動でキリーラ・ペツローウィッチの氣に入つたのである。彼はキリーラ・ペツローウィッチに身分證明書とツロエクーロフの親族の一人からの手紙を提出した。その人の宅に

は四年彼は保育者として住んで居たことがある。キリーラ・ペツローウィッチは之を悉く檢べて見て、自分の佛蘭西人が只一つ若いと云ふ事を以て不滿であつた、それは此の愛すべき不足と云ふものを、教師てふ哀れな職分に夫丈け必要とせられる所の忍耐と經驗とが兩つながら存屬しないと考へた故ではなくして、彼の胸に彼自身の疑があつたからであつて、その疑を直ぐ彼に打明ける事を決心した。此が爲に彼は自分の許へマーシャを呼ぶ事を命じた。（キリーラ・ペツローウィッチは佛蘭西語を話さなかつた、そこで、彼女が彼に通譯人として侍つた。）

『此處へお出で、マーシャ、お前此の Monsieur（お方）にかう云ふ事を云つてお呉れ、私は、その、何うあつても、ただ、彼が私の女中共へ淫な情から手を出さないと云ふ條件の下に彼を入れるとしよう、が、若しそれを違へたら、

それこそ、俺は彼奴を、犬の兒めを……いゝか、之を彼に通辯するんだ、マーシャ。」

マーシャは顏を赤め、そして教師に向つて、彼に佛蘭西語で、彼女の父が彼の溫順と規律正しい身の行を希望してゐると告げた。

佛蘭西人は彼女に、お辭儀をし、それから、彼は、例へ、若し彼に懇親を拒んでも、尊敬を得る事を希望すると云ふ事を答へた。

マーシャは彼の返答を語通り通譯した。

『可、可！』キリーラ・ペッローウィッチは云つた『彼の爲には懇親も尊敬も要つたものぢやないさ。彼の仕事はサーシャを世話する事と文法と地理を教へるのだ……之を彼に通譯せう。』

マリヤ・キリーロヴナは父の粗暴な語句を自分の飜譯に於て柔げた。そこで

キリーラ・ペッローウィッチは自分の佛蘭西人を傍屋に放つた、其處には彼に部室が指定されてあつたのである。

マーシャは若い佛蘭西人に何等の注意も拂はなかつた。貴族的偏見に教養されてゐる彼女に取つては教師は下男や職人と選ぶ所がなかつた、そして下男や職人と來ては彼女には男とは見えなかつたのである。彼女は、自分に依つてデフォルジャ氏の上に作り示された所の印象をさへ、卽ち、彼の混亂をも、彼の激揚をも、聲の變つた事をも認めなかつたのである。

幾日かはその後引續いて彼女は・可也屢々彼と顏を合した、が大した注意を拂ひもしなかつた。思掛けない方法に依つて彼女は彼に就いて全く新しい了解を得たのである。

キリーラ・ペッローウィッチの屋敷には何時も數匹の仔熊が養つてあつた。そ

して、人々はボクローフスコエの地主の重な快樂の一つを作つたのである。仔熊の幼い最初の時には、それが毎日客間へ引張り込まれるのであつて、其處でキリーラ・ペッローウイッチは、猫や兒犬をそれに嗾けて、凡ての時間を、潰すのであつた。一匹前に成長すると、彼等は鎖に繋がれ、愈々本調子の嗾にと廻される事となるのであつた。時折彼等を邸の窓の前に連出して來て、釘を打出した空の酒樽をそれに轉し掛ける事があつた。すると、熊の先生、それを嗅き廻して見て、それから樽に觸れた、掌をチカッとやられたので、怒つてそれを一層力強く突飛ばす、そこで益々痛い目に遭つたで、先生こん度は全く逆上げて了つたとあつて、みんなが哀れな猛獸から空しい憤怒の的を取除けて了ふまでは、その樽を目掛けて吠え立てゝは飛掛り又吠立てゝは飛掛ると云ふ有樣であつた。偶には一對の熊が箱車に繋付けられ、それに客が否應なしに乘せられ

て、それが何うならうと頓着なしに、何處までゝも駈飛ばさすと云ふ事があつた。然しキリーラ・ペッローウイッチにもつとよい悪戯と思はれたのは次の事である。

空腹になつてゐる熊を、壁に螺旋込まれた輪に綱で結付けて空室に繋いである事がよくあつた。綱は殆ど室中に屆く丈の長さがあつて、只一つ反對側の隅が恐しい猛獸の攻撃から危險を避ける事が出來た丈である。みんなが常もよく此の部室の扉の所へ新參者を連れて來て、不意に彼を熊の居る所へ突込んで、扉をぴしやんと閉めた。そこで、不幸な犧牲となつた彼は毛深い隱者と差向ひに置去りにされた。襤褸々々にされた裾と搔裂かれた手とを持つた哀れな客は直ぐに危險の無い隅を搜出した、然し時々は、全三時間も壁にへばり着いて立ち盡したまゝ、彼から二足の所で飛上つたり、後足で立つたり、吠えたり、

それから前方へ突進し、彼の居る所まで達しようと足掻いたりするのを見てゐなければならない目に逢はされたのである。斯くの如き事がロシヤの紳士の貴族的遊興であつたのだ！教師の到着後數日が經過して、ツロエクーロフは彼の事を思出した、そこで彼を熊の部室で饗應する事を思立つた。此の爲に或る朝彼を呼んで、彼は暗い歩廊に連込んだ。俄に傍の扉が開いた――二人の下僕が佛蘭西人を部室の中へ突込んで、扉を閉め鍵を掛けて了つた。はつとした教師は繋がれてゐる熊を見た。猛獸は鼻息を發し、遠くから自分の客を嗅き出したが、俄に、後足で立つて、彼の所へやつて來た……佛蘭西人はびつくりしはせなかつた。走り出しもせないで襲撃を待ち受けてゐた。熊は目近く詰寄つた。デフォルジュは袋から小型のピストルを取出し、それを餓えた猛獸の耳に突込んで發射した。熊は倒れた。皆の者が駈けつけて、扉は開かれた、――キリーラ・ペ

ツローウィッチが入つて來た、自分の惡戯の結果に驚愕の體。

キリーラ・ペツローウィッチは案に違はず出來事の一切に對する釋明を欲求した。誰がデフォルジュに、彼の爲に準備されてあつた惡弄を豫告したのだらうか、でなけりや、なぜ彼の袋に彈丸を込めたピストルがあつたのだらう？彼はマーシャを呼びに遣つた。マーシャは駈附けて、佛蘭西人に父の訊問を通譯した。

『私は熊の事は聞いてはゐませんでした』デフォルジュは答へた『然し何時もピストルは身につけてゐます、なぜと申しますれば、私の職分にあるが爲に、滿足な要求が出來ないと云ふ樣な侮辱に對しては私はそれを忍ばうとする意志を持つてゐないのです。

マーシャは驚いて彼を眺め、キリーラ・ペツローウィッチにその言葉を通譯した。キリーラ・ペツローウィッチは何も答へなかつた、熊を引摺り出してそれか

ら毛皮を剝取る事を命じた。それから自分の召使に向つて云ふ事には

『何と云ふ素晴らしい奴だ。彼奴は怖氣なかつたんだ。ウン、確に屁とも思はなかつたんだ』

此の瞬間から彼はデフォルジュを愛した。そして最早彼を試みやうとは思はなくなつた。

然し此の出來事は尙一層大きな印象をマリヤ・キリーロヴナの上に作出した。彼女は想像して見て驚いた。彼女は死んだ熊と、その上に靜に立つて彼女に話しかけてゐるデフォルジュとを見た。彼女は、勇氣と高慢な自愛と云ふものは決して獨り一階級に屬するものではないと云ふ事を見て取つた。そして夫れ以來、若い教師には尊敬を示すやうになつた。それが又時を追ふて益々謹愼の度を加へたのであつた。彼等の間に或交際が開始された。マーンヤは素敵な音聲と大なる

音樂的の天分を有つてゐた。デフォルジュは彼女に學課を授ける事を引受けたのである。其の後マーシャが、自分ではまだそれに氣付かずにゐ乍らも、彼に心を惹付けられていつたと云ふ事は讀者には最早察するに難くない事である。

九

祭日の前の日客が方々からやつて來出した。或者は主人の宅や傍屋に留り、或者は支配人の所に、或者は僧侶の所に、又或者は不足のない百姓共の所に宿を取つた。厩は旅客達の馬で一杯になり、庭や小舍は色々な馬車で空場の無いまでに詰置かれた。朝の九時には祈禱文式に號鐘を打始めた、そこで總ての人達は新しい石造の教會堂にぞろ〳〵と行列を作つた、その教會堂はキリーラ・ペツローウィッチに建立されたもので、毎年彼の供物を以て飾附けられてあつ

た。非常に多くの身分の高い信心者達が集つたので、普通の百姓共は堂内に席が占められないで、玄關前の石段やら柵内に立つてゐた。祈禱文式は始らなかつた。皆はキリーラ・ペツローウィッチを待つてゐた。彼は六頭立の幌馬車で到着した、そしてマリヤ・キリーロヴナに伴はれて、威風堂々と自分の席に歩を運んだのである。男も女も彼女の方へ頭を向けた——或者はその美しさに驚かされ、又或者は非常な注意を以て彼女の服裝を檢視した。祈禱文式が始つた。家附の歌手は唱歌所で歌つた、キリーラ・ペツローウィッチ自身もそれに合した、又右にも左にも振向かず、祈禱して、それから、牧師が此の教會の建立者に就いて聲高に述出した折しも、彼は高慢な謙讓を以て地まで低頭したのであつた。祈禱文式は終つた。キリーラ・ペツローウィッチは第一番に十字架の許に歩寄つた。一同の者は歌隊と共に彼の後に動搖した。隣人達は尊敬を以て彼の許へ

近寄り、婦人達はマーシャを取圍んだ。キリーラ・ペツローウィッチは、教會を出て、一同の者を自分の所へ馳走に招き、幌馬車に乘込んで、それから歸路についた。一同は彼に續いて出發した。部室々々は客達で一杯になつた。絶えず、チョイ〳〵新しい顔は入つて來て、主人の許まで分け進むのに一苦勞を要した。貴婦人達は行儀正しく半圓形に席を占めた、見れば昔流行つた物を召して御座つて、着古して擦切れた所もあるが、減法高價な衣裳には違ない、みんなそれに眞球やダイヤモンドが輝いてゐる。男達はお互同士語ひ合ひ乍らがや〳〵と騒立つて魚卵（イクラー）と火酒（ウオツカ）の周圍に群集（たか）つた。食堂の大廣間には八十人前の食卓食器が陳置かれた。召使共は瓶だの、玻璃罎（グラフイーン）だのを置廻るやら、卓子掛を直すやらのやつさもつさ。遂に執事が宣言した。

『食事の用意が整ひました！』——そこでキリーラ・ペツローウィッチが眞先

に食卓へつきに行つた、彼の後に貴婦人達が續いて進み、それから或る上席を目差して、流石に勿體振つた樣子で自分々々の席を占めた。若い婦人達は、臆病な山羊の群見たいに、お互同士へし合ひ込合つて、次々にと自分の席を撰んだ。その向側に男達が席を占めた。食卓の端には小さいサーシャの側に教師が坐つた。

召使等は客の階級に應じて皿を運んだ、何れの順序か確乎と分らない場合に出會すと彼等は一種の直覺的推察に任せるのであつたが、それで以て、大概何時も間違なく行つた。皿や匙の音は客達の喧しい話聲とこんがらかつた。キリーラ・ペツローウィッチは愉快さうに自分の食膳を熟々と眺めて、客を厚遇すると云ふ事の幸福に全く心を浸してゐた。此の時、折しも六頭立の幌馬車は構内に乘込まれたのである。

『彼は誰だね？』主人が訊いた。

『アントン・パフヌーチィチでございます』と數人の者が答へた。扉は開いた——そこで件のアントン・パフヌーチィチ・スピツィンの先生、太つちよの男で、歳は五十ばかりと覺しく、丸顏で痘斑面、三つ顎で光彩を加へたるが、食堂へ轉り込んだと見れば、頭を下げる、微笑を示す、それから早もう申譯をしようとしかけてゐる態。

『一人前持つて來い！』キリーラ・ペツローウィッチが叫んだ『何卒、アントン・パフヌーチィチ、お掛けなさい、それから聞かして呉れ給へ、何う云ふ譯ですかな——私の祈禱文式には列らず。晩餐會には遲れるなんてのは？是は君のする事らしくはない樣ですね。君は信心者だし、それに喰べる事だつて仲々讓らない方だもの』

『御免下さい』アントン・パフヌーチィチは上衣の豌豆の縫飾にナプキンを括

付け乍ら答へた『何うも濟みませんでした、キリーラ・ペツローウィッチ様、私は早く出發は致しましたですがね、所が十露里(ウエルスタ)も走らない先に、俄に前輪の輞帶(タイア)が切れましたですよ——さあ、何うしましたらよかつたでせう？幸な事には村から遠くなかつたでようございました。けれども、村まで引張つて行つて、鍛冶屋を探しつけたり、それから、まあ、兎に角、すつかり整へ終るまでには、丁度全三時間かゝりましたよ——何たつて他には仕方が無かつたのですもの。キステーネフカの林を抜ける近道は通る事を控へました、そして、その廻道を取つたのでございますよ』

『成る程！』とキリーラ・ペツローウィッチが斷切つた『して見ると、君は十勇士の仲間入は出來ない理だね、何が君は怖かつたね？』

『まあ、何を怖がるかでございますつて、キリーラ・ペツローウィッチ様、だ

つてゾブロフスキーをですよ、彼奴の手に攫まらうものなら大變ですからね。彼奴は一旦睨んだら間違のないと云ふ若者でして、誰だつて遁す氣遣は有りませんよ。そして、若しも私でも捕へようものなら、二の毛皮まで剝取るだらうと思ひますね』

『怎う云ふ理で、兄弟、そんな特別があるんかね？』

『何う云ふ理とは又何うした事です、キリーラ・ペツローウィッチ様？死んだアンドレー・ガブリーロウィッチの訴訟に對してではありませんか？私ではありませんか、貴方の御滿足の爲めに、申しますれば、その、良心と正義に從つて、ゾブロフスキーの眷族は何等の正當な權利もなくしてキステーネフカを領有してゐたので、それは只單に貴方の寛容に因るものだと云ふ事を示しましたのは。それに故人(あのひと)は——桑原々々！——自分の思ふ樣私に怨恨を晴さずにはを

かないぞと誓つたのです、して見ると、息子は父の言葉を守つてゐると思ひますよ、今日までは神様がお慈み下さいました、高が私の宅では一つの穀倉を掠めた丈なんですからね、けれど、その内には本家までやつて來はしないかと氣懸でなりません』

『そして、本家の方だと彼等は思ふ存分にやらかせるからね』キリーラ・ペツローウィッチは云つた『赤い小さい金函には一杯に詰込んであらう譯だから』

『飛んでも御座いません、キリーラ・ペツローウィッチ様、一杯の事も有るには有りましたが、然し、今日ではすつかり空になりましたですよ!』

『嘘をつくのは澤山だね、アントン・バフヌーチィチ。僕等は君を知つてるからね、何處に君遣つて了ふ道が有りますかね、宅では、君は豚見たいにやつて行き、誰も客を迎へるではなし、自分の百姓共からは剝取る一方だつたら、

金はどん〳〵と積集めるばかりぢやないかね。』

『みんな御冗談をおつしやいますよ、キリーラ・ペツローウィッチ様』アントン・バフヌーチィチは微笑を以て呟いた『併し、嘘ぢやありません、實際に私共は破産したのですよ』と云つてアントン・バフヌーチィチは主人の冗談を脂じみたクレビヤーカ（魚製菓子パン）の片と共に呑下した。キリーラ・ペツローウィッチは彼を置いて、今度は新任の警察署長に向つた。彼は始めて彼の許へ客となつて來たのであつて、食卓の他の端に居つて、教師の傍に坐つてゐた。

『如何ですな、警察署長さん、直に貴方はヅブロフスキーを捕へますかね?』

警察署長は面喰はされたか失望の體、頭を低げ微笑は作らつたが、云ひ出さうとして訥る、それから頭到發音したのが、かうだ。

『努力を致しませう、閣下』

『フン！努力を致しませうですかね。ずつと〳〵前から努力はして御座るが、やつぱり、何うも效驗は有りませんな。だが、御尤の事、何の爲に彼を捕へるですか？ヅブロフスキーの掠奪は警察署長に取つては感謝すべき事ですからな、旅行したり、調査をして見たり、馬車を驅廻したりすれば、金は自然に懷の中に溜つて來る、何うしてそんな仁者を亡していゝものですか？ねえ、さうではないですか、警察署長さん？』

『全くの眞實でございます。閣下』と全然混亂して了つてゐる警察署長は答へた。

客達はどつと笑ひ出した。

『私はあゝ云ふ眞實を打明ける青年が好きですね』とキリーラ・ペツローウイ

ッチが云つた『何うも、そうして見ると、此處の知事からの援助は待たないで、私自分で事件に着手する必要が起りますな。だが、故人の警察署長タラス・アレクセイウイッチは可哀相ですね。若しも彼が燒死なゝんだら、近所近邊はそれで安穩だつたでせうがね。してヅブロフスキーの事に就いては何んな事を聞いてゐますね？最近には何處で彼を見ましたですかね？』

『私の宅でゝすの、キリーラ・ペツローウイッチ』太つた婦人の聲がピイ〳〵と甲走つた『先週の火曜日に彼が私の宅で食事しましたのよ』

皆の顏は、その善良な、愉快な性質の爲に凡ての人に愛せられてゐる、可也單純な顏付のアンナ・サヴイシユナ・グロボーワに向けられた。一同の者は好奇心を以て彼女の物語を聽かうと用意した。

『先づ貴方樣方にお聞せ致さねばなりませんのは、三週間程前の事、私が支

配人を私のワニューシャの爲に手紙を持たせて郵便に遣つた事でございますの。私は息子を甘やかしは致しません、それに、例へ、さうしたいと思ひましたつて、甘やかす樣な身分でもありませんものね、ですけれど、皆さんも御存じの通り、近衞隊の將校には相當な風をして暮して行かなければなりませんから、私もワニューシャに私の收入で出來る丈けの事はしてやりますのよ。所で、ほれ、二千留彼に送りましたわ。ヅブロフスキーの事はそりや一度ならず、度々も私の頭に上りはしましたけれど、だつてかう考へますわ。町は近い、たつた七露里だもの、多分神樣が間違のないやうに屆けさして下さるわつて。所が、何事でせう。晩になつて、宅の支配人は、眞蒼な顏をして、襤褸々々な着物で歩いて歸つて來るんぢやありませんか、まあ、私は何んなに嘆息しましたでせう。

「何事なの?まあ、お前さん、何うしたつての?」と訊くと、彼が斯う云ひますの、「奥さん、アンナ・サヴィシュナ、追剝共にやられました、も少しで自分は殺される所でした。ヅブロフスキー自身が其處に居ました、私を絞殺さうとしましたが、哀んで許して吳れました。その代りみんな偷取つて了ひました、馬も、馬車も、取上げて了ひました」つて、私は驚いて、氣が遠くなつて了ひましたわ、おゝ神樣、私のワニューシャは何うなるのでございます?かう私の口からは嘆息が洩れるばかりでした。仕方はありませんし、私は再び手紙を認めて、凡ての出來事を物語り、お金は一錢も與へずに自分の祝福を彼に送つてやりましたのよ、

一週間、又次の一週間と日は經ちましたわ。すると突然、私の屋敷を差して幌馬車が參りましたのですよ、或る將軍の方が私に御面會をお求めになりました

から、お入りを願つた譯ですの。這入つて來られた方を見れば、歳は三十五歳ばかりの人で、色が黑く、黑い頭髪で、口髭と顎髯があつて、クリネーフの肖像そつくりなの、何でも死んだ夫のイワン・アンドレーウィッチの友達で、同僚とかつて紹介致しましたわ。其の人は偶然近所を通過する所でしたのが、私が、其處に住ひしてゐると云ふ事を知つて、舊友の寡婦だつてんで其所へ立寄らずにはゐられなかつたのですとさ。私は其の人を、有り合せの物ばつかしでお饗宴し致しましたわ、彼や此やとお話しの末にはヴブロフスキーの事もお話しましたの。私は自分の悲しい出來事を其の人に打明けました。すると、その將軍は顏を顰めて、かう云ひましたの。

「此は不思議です。私は、ヴブロフスキーは誰も彼も襲ふのではなくて、目星しい金持丈けで、それでさへも、幾分は彼等の物を殘してやり、決して悉く

は卷上げないとこそ聞いてゐますよ。それに、彼が殺人をやらかすとは誰も認めて居りませんが。何か此には巧な欺騙があるのでは無いですかね？貴女の支配人を一寸お呼び下さいませんか」つて。

支配人の所へ使の者共が參りました。で彼は出て來ました。所が、彼は將軍を一目見るなり立竦んで了ひましたの。將軍は

「俺に話して聞せ給へね。兄弟、何んな風にヴブロフスキーは君を掠奪したんだね？　又何うして君を絞殺さうとしたかね？」つて尋ねましたわ。支配人を見れば、ぶる〳〵振へ出してゐて、それから、將軍の足許に倒れ伏したぢやありませんの。そこでかうですのよ、「旦那樣、私が惡うございました。罪が私を誘惑致しました……私は嘘をつきました」つて。すると、將軍は「さうだつたなら、奥さんにさうと話しなさい、それは全體何うして起つたんだね、私は聽

いてゐるよう』と答へました。けれど、支配人は正氣に歸る事が出來なかつたのですわ。

「さあ、何うだつたんだね、話して見なさい、何處で君はヅブロフスキーに出逢つたんだね？」と將軍が語を續けますと、「二本松の所で、旦那樣、二本松の所です」と申しましたわ。

「何と彼はお前に云つたかね？」と云ひましたら、答へますには、

「彼が私を尋ねました。――貴樣は誰の使だ、何處へ行く、何しにだ――つて」と。

「フン、それから？」と訊きましたら、

「それから彼は手紙と金を出せつて迫りました。そこで私は彼に手紙と金を渡しました」つての。

「そして彼は？」と追求すると

「へい、そして彼は……旦那樣、濟みませんでした！」てな調子でございましたわ。

「さあ、それで彼は何うしたんだね？」と云ひますと、

「彼は金と手紙とを私に歸しました、それからかう云ひました――いゝからさつさと行つて、郵便に出し給へ、つて」と答へましたわ、

「ウン！」と將軍が力の籠つた聲で首肯くと、

「旦那樣、濟まない事を致しました！」つてましたつけ。

「私はお前をそれぢや濟まさないぞ、間抜け奴」と將軍は嚴な顏付で申しますと、今度は私に向つて、

「では、奥さん、貴女は此の泥棒の鞄を探出すやうにおつしやつて、それか

ら彼奴を私の手に渡して下さい、私は彼奴を懲しめてやりますから。ねえ、何うです、ヅブロフスキー自分は近衛隊の將校だつたので、決して同僚を辱める様な事は欲しないでせう、」と云ひましたの。

私は其の方が何んな人だかゞ推察出來ましたわ、ですから、何も其の人に彼此と申したりする必要はなかつたのですの。馭者共が支配人は幌馬車の中に縛付けましたし、お金は見付け出しましたわ。將軍は私の宅で食事をして、それから直に出發して、支配人を引連れて行きましたの。翌日林の中で私の支配人が樫の木に縛付けられてゝ、何だか、かう、菩提樹見たいに襤褸々々にせられて、引剝がれてるのを皆んなが見付けたのですのよ』

一同の者共は、特に婦達はアンナ・サヴィシュナの物語を默つて聽いてゐた。その中の多數は、彼の中にロマンチックな英雄を認めて、私にヅブロフスキー

に幸あれかしと願ふのであつた、その中でも、熱情的な冥想家で、ラドクリーフの神祕的な恐怖と云ふものが頭裏に泌込んでゐるマリヤ・キリーロヴナは殊更さうであつた。

『所で、アンナ・サヴィシュナ、貴女はヅブロフスキー自身が貴女の所へやつて來たと思ひますかね?』キリーラ・ペツローウィッチは尋ねた。『大變に貴女は誤解してますよ。誰が貴女の宅へお客になつて來たかは知りませんがね、ただ、ヅブロフスキーではなかつたです』

『まあ、貴君様、何うしてヅブロフスキーぢやないとおつしやいますの?だつて、彼でなかつたら、道へ飛出して來て、通行人を止めたり、それを調べて見たりするのは誰が致しますの?』

『それは知りません、併し、最早ヅブロフスキーでないと云ふ事は確です

ね。私は彼が小兒の折を覺えてゐますよ。彼奴の頭髪は少し黑くなつたかは知りませんが、その時分彼奴は縮れた、亞麻色の髪を持つた小僧でしたね。併し、ヅブロフスキーは私のマーシャより五つ丈け年長だと云ふ事を確に知つてゐます、だからして、彼は三十五歳ではなくして、滿二十三歳ばかりの譯ですね』

『確その通りでございます、閣下』と警察署長が云つた。私はポケットの中にウラヂミル・ヅブロフスキーの人相書を持つてゐます。その中に彼は生れて二十三歳と確に云つてあります』

『はあ！』キリーラ・ペツローウィッチが云つた『序に讀んで下さいね、我々は聽きませう、我々が彼の人相を知つて置くのも惡い事は有りませんで。多分目にぶつ撞かることがあるでせうが、そしたら、さう〳〵巧くは拔出させませんよ』

警察署長はポケットから可也穢い一枚の紙を取出して、物々しく其奴を擴げて、それから歌でも歌ふ樣な調子で讀み出した。

『彼の舊家僕等の言に從ひて作成せるヅブロフスキーの容貌——年齡滿二十二歳、身の丈中脊、顏面淸明、髭髯剃落されたり、眼色は蒼色、頭髪亞麻色、鼻直正、特別なる容相別段云ふべきものなし』

『たつたそん丈け！』とキリーラ・ペツローウィッチは云つた。

『それ丈けでございます』と警察署長は紙を疊み乍ら云つた。

『お目出度う、警察署長さん、素晴らしい書類ですな！此の人相書に依れば貴方がヅブロフスキーを探出すのは減法易い事でせうな！だつて、君、誰が中脊でないですかね、誰に亞麻色の頭髪と、眞直い鼻とがありませんかな、それから又蒼色の眼とが？賭をしますよ。三時間ぶつ續けにヅブロフスキー自身と

話をした所で、あんたは神様が誰にあんたを引合してゐたか氣がつきやしないでせうよ。全く爭ふ事の出來ない賢いお官吏様方ですな！』

警察署長は大人しくポケットに自分の紙を收めて、默つたまゝ鷲鳥とキャベツの皿へかゝつた。その間に召使共は一人々々一同の洋杯に注いで行つて、最早數回客達を廻つたのであつた、カフガズの酒の數本の瓶が音高く栓を抜かれた、そこで、それがシャンパンの名の下に珍重して受けられたのである。人々の顏は赤くなつて來、會話は一層聲高になり、纒りなくバラ〳〵になり、一段と愉快な氣分を浮立たせた。

『否、なんです、』とキリーラ・ーペツローウィッチは續けた『もう我々はあの死んだタラス・アレクセイウィッチの様なあんな警察署長を見る事はないですね！彼はかうだと睨んだらその通り間違の無かつた男で、決して間が抜けてな

かつたですよ。あの先生を燒殺した事は何うも殘念ですね、若し、さうでなかつたら、凡ての徒黨中で一人だつて彼の手からよう逃げはしなかつたでせうよ。彼だつたら一人も殘らず捕縛して了ひ、さうです、確にゾブロフスキー自身だつてよう拔出なかつたでせうね、タラス・アレクセイウィッチだと彼から金を卷上げる丈けは卷上げて了つて、おまけに、肝腎な彼は逃してやらないで引つ捕へたですよ。さうした遣口が故人の常でしたね。何うも致し方はないです。此れでは、私が此の事に當つて、家僕等と共に追剝等に向はなければなりませんね。先づ第一追剝等の森を掃蕩する爲めに二十人を分遣すです。私の宅の者等は臆病者でないで、何れも、此れも一人で荒熊に向つてでも行くと云ふ連中だから追剝等に後退なんかしないですよ』

『貴君の熊は達者で居りますか、キリーラ・ペツローウイッチ様？』とアント

ン・バフヌーチィチは、此等の言葉に依つて、毛深い知友の事を思出し、又何時か彼が其の犠牲となつた或る悪戯事を想起して、かう云つたのであつた。

『ミーシャ(熊の名)はお淨土參りをしました』キリーラ・ペツローウィッチは答へた。

『敵の手に斃されて、立派な死を遂げたです。それ、彼處に居るのが彼の勝利者です!』キリーラ・ペツローウィッチはデフォルヂュを指した。佛蘭西人にお禮を申しなさい、彼は貴方の爲めに復讐したのです……もしさう云ふのをお許しなら……ねえ、覺えてゐるですか?』

『何うして覺えてない事がございますものか?』アントン・バフヌーチィチは頭を搔き乍ら云つた『大いに覺えてゐます。なる程、ミーシャは死にましたですか——可愛相だな、實際殘念でございますよ!何と云ふ面白い奴だつたでせ

う!本當に賢い奴だつたぢやありませんか!あんな熊は他に探出さうたつて出來ませんですね。だつて、Monsieur(あのひと)は何だつて彼(あれ)を殺したのでございますか?』

キリーラ・ペツローウィッチは大の滿足を以て自分の佛蘭西人の功繼(てがら)を語り始めた。なぜならば苟も彼を取卷いてゐた程の物は何物と云はず大法螺を吹きまくつて自慢をすると云ふ至極お目出度い能力を有つてゐたからである。客達は注意を拂つてミーシャの死に就いての物語を聽き、驚いてデフォルジュを眺めたのであつた、彼は、自分の勇氣に關する事が會話の主眼であつた事を疑はず、靜に己が席に腰を下して、自分の悪戯好の生徒に行儀の注意をしてゐたのである。

約そ三時間も續いてゐた所の食事は終つた。主人はナップキンを食卓の上に

置いた。一同は席を立つて、客間へ行つた、其處では、コーヒーや骨牌や、又食堂で始めたものに劣らぬ盛大な酒宴の繼續が彼等を待構へてゐたのであつた。

十

晩の七時頃になると、幾人かの客達は出發しようと欲した。併し、プンシュ（酒の一種）で全く好い氣分になつてゐる主人は、門を閉る事を命じて、翌朝迄は誰一人も屋敷から出さないと云ひ渡した。間もなく音樂は響渡り、大廣間への扉は開かれた、――そこで、舞踏が始つた。主人と彼の近親の者共は片隅に腰を下し、杯（グラス）を呑干しては又呑みほし、若者等の愉快なのを見て嬉しがつてゐた。年老いた婦人達は骨牌に遊んだ。踊手の紳士は、何處でもさうだが、何んな

な鎗騎兵の旅團も屯營してゐない所とて、婦人達よりも少かつた。で、舞踏に間に合ふ男達はみんな徴募されたのであつた。教師は皆の中でも際立つて優れてゐた。彼は誰よりも多く踊つた、皆の若い婦人達は彼を撰んだ、すると、彼がワルツを非常に上手に踊る事が分つたのであつた。數回彼はマリヤ・キリーロヴナと踊狂つた。そこで、若い婦人達は面白がつて彼等を觀てゐた。遂に、夜中頃ともなつて、疲勞した主人は舞踏を止めさせ、晩餐の食を出すやうに命じて、自分は寢に赴いた。

キリーラ・ペツローウィッチの居なくなつた事は、一般の客により一層の自由と活氣とを與へた。踊手の紳士達は稍々大膽に出て、婦人達の傍に席を取つた。娘達は自分の隣の人と笑つたり、囁合つたりした。奥さん達は卓子越しに聲高く話合つてゐた。男達はと見れば、之はまた飲んだり、議論したり、笑つた

りと云ふ有様だつた。で、一口に云つて了へば、晩餐は非常に愉快であつて、自分々々に多くの氣持良い思出を殘したのであつた。

茲に只一人一般の喜に與らない者があつた。アントン・パフヌーチィチは眉を曇らし、無言で自分の席に坐つてゐた、食ひはすれど、心は空に、打見た所甚く不安の體であつた。追剝に關する會話は恐しい想像を產んで、彼の胸に波を立てた。我々は彼がそれを恐れる充分な理由を持つてゐた事を直ぐに知るのである。

アントン・パフヌーチィチは、小さな、赤い金箱が確に空であつたと云ふ事の證人に神樣を呼出したところで、それは決して嘘をついても、罪を犯してもゐなかつた。赤い金箱は全く確に空であつた。嘗てその中に保存されてゐた金は、彼がシャツの下で、胸にぴたと着けて運び歩く革の懸囊の中へ移つて行つ

てゐたのである。此の非常な注意を以てのみ彼は、皆に對する不信や何時も絶えない心配を靜めて、打寛いだのであつた。他人の宅で一夜を過す爲めに留るやうに餘義なくされたので、彼は何處か淋しい部室で、盜人の譯なく這込む樣な所へ泊らされなければよいがと心配してゐた。彼は好ましい仲間を目搜した末、遂にデフォルジュを撰んだ。力を明に表してゐる所の彼の容貌と、尙多くは、熊に撞着かつた時に彼が示したあの勇氣……と云へば、哀れなアントン・パフヌーチィチは身震せずに思出す事は出來なかつたのである、——とが彼の撰擇を決定したのであつた。皆が食卓を立つた折、アントン・パフヌーチィチは若い佛蘭西人の近邊を隨いて廻り出し、喉から嬉氣な聲を出すやら、咳拂をするやらしてゐたが、到頭彼に向つて話掛けた。

『ウン！エヘン！私に、Monsieur. 今夜貴方の部屋で一夜を明す事は出來ませ

んかゃなんですから、ね、その……』

『Que désire monsieur? (貴方、何の御用ですか?)』

と彼に恭く頭を下げたデフォルジュは尋ねた。

『あゝ、こいつ困つた! あんたは、Monsieur. まだロシヤ語を敎はつてゐませんね。Не ве, муа ие ву куие (Je veux moi chéz vous coucher.) (「私は貴方の所で寢る事を私は欲します。」と云ふ怪しい佛語) 分りますか?』

『Monsieur, très-volontiers.(「貴君、何卒、お易い事です」位な所である)』

デフォルジュは答へた『Veuillez donner, des ordres en conséquence.(何うぞ、その事に就いてお取計らひ下さい)』

佛蘭西語に於ける自分の知識を以て非常に得意であるアントン・パフヌーチイチは直ぐ取計らひをなしに行つた。

客達はお互同士就眠の挨拶を述べて、悉く自分等に定めてあつた部屋に赴いた。して、アントン・パフヌーチイチは教師と共に傍屋へ行つた。夜は暗黑であつた。デフォルジュは手燭で道を照した。アントン・パフヌーチイチは彼の後に隨いて可也威勢よく歩いた、その途次、時々祕藏の懸囊を胸に押つけ〳〵してゐたのは、蓋し彼の金が未だ自分の身についてゐると云ふ事を確める爲めであつた。

傍屋へ着くと、教師は蠟燭に火を點した。そこで、二人は着物を脫ぎ始めた。その間にもアントン・パフヌーチイチは、錠や窓を檢視する、それから又、此の慰めなき檢閲に於て頭を振るなどしつゝ、部室中を歩廻るのであつた。扉は一つの閂で鎖されてある丈けだつたし、窓はまだ二重の窓匡が塡つてなかつた。彼はそれに對してデフォルジュに不平を云はうとしかけた。併し、佛蘭西

語に於ける彼の知識はそんな込入つた説明をする爲めには餘りに限られてゐたのであつた。佛蘭西人は彼を了解しなかつた。そこで、アントン・パフヌーチイチは自分の歎願を擲つ事を餘義なくされた。彼等の寢臺は向うと、此方と別々に置かれた。二人が横ると、教師は燈火を消した。

『Пурпуя by Тушe, пурпуя by Тушe! (なぜ貴君は消すのです、なぜ貴君は消すです?』)

とアントン・パフヌーチイチはカツと逆上げて佛蘭西語の中にロシヤ語の「消す」と云ふ動詞を佛蘭西語的に變化した奴を交ぜて叫んだ。

『私は暗闇の中では Dormir (眠ることが)出來ないです』

デフォルジュは彼の感歎を解しなかつた、で、彼が落着いて眠る事を望んだのであつた。

『忌々しい囘々教徒奴!』とスピツインは蒲團に潜込み乍らブツ/〳〵云つた。『あの野郎燈火を消さずには居れなかつたんだな。彼ん畜生愈々以て不都合な外道だ。俺は燈火無しにや眠らりやしない。——Myсe. (君) Myсe (君)』彼は續けた『Не ве аверть by парле. (僕、君と話したいです)

佛蘭西人は答へず、間もなく鼾をかき出した。

『鼾をかいてやがるな、佛蘭西の畜生奴』——アントン・パフヌーチイチは考へた——己は眠るなんて事さへも考へてはゐないんだのに。開いた扉から盗人が入込むか、窓に攀上つて來る樣な事はないか知ら、心配だな、ところであん畜生と來たら何うだ、大砲を撃つた所で目を覺しはしないで。Myсe! a myсe! (君!おい君!)——糞ッ!』

アントン・パフヌーチイチは默つて了つた。疲勞と酒の氣が段々と彼の臆念

を打消して行つたのである。彼は微睡みかけた、と間もなく深い眠が彼を全く捕へたのであつた。

奇妙な感覺から彼は目を醒す事になつた。彼は、誰かが自分のシャツの襟を靜に引張るのを、夢を通して感じたのであつた。アントン・パフヌーチィチは目を見開いた、と、秋の朝の蒼い光に依つて自分の前にデフォルジュの居るのを見た。佛蘭西人は片方の手にポケットのピストルを持ち、他の片手では祕藏の懸囊を奪取つてゐるのであつた。アントン・パフヌーチィチは氣絶せんばかりにビックリした。

『Несь ке се, Мусье, несь ке се?(此は何事です、君、此は何事です?)』

と彼は震聲で發音した。

『シッ!靜にしろ』教師は鮮なロシヤ語で答へた、『默つてゐろ!さうでないと貴樣を殺しちまふぞ。己はヴブロフスキーだ』

十一

我々は、今此の處に於て、既に先立つた所のもので、まだそれを話する運びに至らなかつたところの、事の次第を述べ、以て我々の物語の前の出來事を說明する事を讀者に許して貰ふ事にしよう。

我々が既に述べた事のある某絡驛に於て、管理人の宅に、穩順で、忍耐强い樣子をしてゐて、明に只の平民か外國人かに相違ない、卽ち、郵便路に對しては權利を有つてゐない人だと云ふ事が直ぐ分る旅人が隅つこの方に坐つてゐた。彼のブリーチカ(輕便な車)は外に置いてあつて、油を差すのを待つてゐるのであつた。その中には小さな鞄が横つてゐた、それは甚だ裕福でない身分

のちつぼけな證據物であつた。旅人は、茶もコーヒーも註文せず、窓を眺めて口笛を吹鳴らしてゐた、それは隔壁の向うに坐つてゐた管理人のお内儀さんに大變な不滿を買ふ事となるのであつた。

『まあ、誰があんな口笛吹をよこして來たのかしら』彼女が小聲で云つた『まあ、本當に吹いてる事つたら！一層の事吹裂けちまへばよいのに、忌々しい囘々教徒だわ』

『何だつて？』管理人が云つた『怎んな悪い事があるんだい？吹くなら勝手に吹かしとけ』

『怎んな悪い事があるかですつて？』憤つた妻は問返した『では、まあ、前兆だつて事を御存知ないの？』

『怎んな前兆だい？口笛を吹くと金を追出すつて事かい？所が、バホモーヴナ！己等の所では口笛を吹かうが、吹くまいが、金は無いと來たら根つから無いんだで』

『さあ、貴郎、彼を行かしちまひなさいな、シドルイチ。貴郎には彼が留めて置きたいのね。馬を出してやつて、何處なと勝手な所へ行かして了ひなさいよ』

『彼は待つてゐるよ、バホモーヴナ。既にはたつた三臺の三頭立馬車がある丈だよ、四つ目のは休んでゐるんだ。良いお客が來はしないかとそいつが氣になるんだ。己は佛蘭西人に對して自分の首を賭けたくはないさ。それ！案の狀だ！向ふを走つてるわい！エヘ！何んなもんだい！おゝ、まあ、あの速い事は何うぢや！はて、あれは將軍ではないかな？』

幌馬車は階段の所へ停つた。從僕が山羊皮の席から飛下り、小さい扉を開い

た。それから一分間の後には、軍隊の外套を纏うてゐて、白い帽子を被つた青年が管理人の許へ入つて來た。彼の後に續いて、從僕が箱を提込み、それを窓臺の上に置いた。

『馬だ！』と將校は命令者然たる聲で云つた。

『へい、只今！』管理人は答へた、『何卒、路票（パドロージュナヤ）をお示し下さいませんか』

『私は路票なんて持つてはしない、私は驛路を通らずに、他の方にだ……お前は私を知らないのかい？』

管理人は世話に取掛り、馭夫の所へ飛んで行つた。青年は部室の中を前へ後へと歩廻り出し、隔壁の向うに入つて行つて、靜に管理人の妻に訊いた。

『誰だねあの旅人は？』

『まあ、誰があんな奴を知つてるものですか』管理人の妻は答へた『何だか

知らないが、毛唐人なんでせうよ、もう、ほれ、五時間になるんですのよ、馬を待つて、口笛ばつかし吹き鳴してるの。厭になりましたわ、忌々しい奴つたら、まあ！』

青年は旅人と佛蘭西語で話し出した。

『貴君は何方へお出ですか？』と彼は旅人に訊いた。

『近所の町へです』佛蘭西人は答へた。『其處から一人の地主の所へ赴くのですが、その人は私を見ずに教師に傭つたのです。私は今日はまう彼處に着いてゐるだらうと思つてましたよ、所が管理人さんが別に何うするのか定めちやつた樣ですね、此の土地では馬を手に入れるのは仲々六かしいですね、將校さん』

『して、貴君は此處の地主の中の誰の所に就職されたのです？』と將校が尋ねた。

『ツロエクーロフ氏の所へです』と佛蘭西人は答へた。

『ツロエクーロフの所へですね？此のツロエクーロフとは怎んな男です？』

『Ma foi, monsieur.（おゝ、貴君、）私は其の人に關しては良い事は殆ど聞いては居りません。噂によると、その人は傲慢な貴族で、我儘で、自分の家僕共を虐たらしく取扱ふので、誰一人その人と一緒に長く住む者もなく、皆はその人の名前を聞いてびく〳〵し、教師等には遠慮なんかちつともせず、もう今までにも二人擲つて殺したと云ふ程です。』

『して、貴君はそんな暴虐な奴の所に就職される御決心ですか？』

『では何致しませう、將校さん？彼は良い俸給を私に提供してゐます、年三千留で、その上一切の費用は出して呉れます、多分私は他の人達よりも幸福だと思ひます。私には年老いた母が居ります。俸給の半分は養老費として彼女に

送つてやる積りです。殘の金からして五年間には　私の將來の獨立の爲には充分である僅ばかりの資本を積聚める事が出來ます。そこで——bon soir,（左樣ならです）巴里へ歸つて、事業に携る考です』

『ツロエクーロフの宅では誰か貴君を知つてゐますか？』と彼は尋ねた。

『誰も知りません』教師は答へた『彼は、自分の友達の一人を通して手紙で私をモスクワから呼寄せたのです。その人の宅に居る料理人が私と同國人でして、彼が私を紹介したのです。申上げて置きますが、私は、初め教師になる積りではなくて、菓子師にならうとしてゐましたのです。併し、噂によると、貴君のお國では教師の職分は大變割がよいと云ふ事です……』

將校は考へ込んでゐた。

『まあ、お聽きなさい』彼は佛蘭西人の語を斷切つた『若しもですね、此の

將來の代に、貴君が直様巴里に引返すと云ふ條件の下に一萬留を現金で提出したとしたら、貴君は如何ですね？』

佛蘭西人は、驚いて將校の顏を見据え、微笑して、頭を振つた。

『馬の支度が出來ました！』と這入つて來た管理人が云つた。

從僕もその通りを反覆した。

『今行く』將校は答へた『一寸出て居れ』

（管理人と從僕は出て行つた。）

『僕は冗談を云つてゐるのではないです』彼は佛蘭西語で續けた、『僕は一萬留を貴君に上げる事が出來ます。僕には只貴君の居て呉れない事と、貴君の書類が必要なんです、』

斯く云ひ乍ら彼は箱を開いて、若干の紙幣束を取出した。

佛蘭西人は目玉を飛出さした。彼は何と考へていゝか知らなかつた。

『私の居らない事……私の書類、』彼は驚を以て繰返すのであつた、『さあ、是が私の書類です…　併し、貴君は冗談をおつしやるんでせう？何の爲に私の書類が貴君に必要なんですか？』

『そんな事には貴君の關係した事ではないです。訊きますが、貴君は同意するですか、しないですか？』

佛蘭西人は、まだ全く自分の耳を信じないまゝに、若き將校に自分の書類を差出した、將校は素早くそれに目を通した。

『貴君の旅券は……よろしい。紹介狀と……見て見ませう。出生に關しての證書は……素敵ですね。さあ、こゝに貴君の金は貴君に上げますよ、後へ引返して下さい。左様なら』

佛蘭西人は埋めつけられてでもゐるやうに、突立つてゐた。將校は後戻りした。

『僕は一番肝腎な事をも少しで忘れる所でした。僕に眞實の言を云つて下さい、此の事を内證にして置くと云ふ事の……貴君の眞實の言を』

『私の眞實の言葉ですね』佛蘭西人は答へた『併し、私の書類は？それが無しに私はどうしたらいゝのです？』

『最初の町で、貴君はヅブロフスキーに掠奪されたと通告なさい。皆は貴君の云ふ事を信じて、必要な證書を呉れます。左様なら。どうぞ、巴里に早く到着されて、無事にお暮しになつてゐるお母さんにお遇ひなさる事を望みます。』

ヅブロフスキーは部室から出て行き、幌馬車に乗込んで、飛ばして行つた。

管理人は窓から眺めてゐた、そして幌馬車が走つて行つて了ふと、叫んで妻

の方へ向いた。

『バホモーヴナ！お前何事か知つてゐるかい？あれはヅブロフスキーだつたんだぞ！』

管理人の妻は性急に窓の所へ身を投げた、然し、最早遅かつたのである。ヅブロフスキーは既に遠方に居た。彼女は夫を罵り出したのであつた。

『貴郎は神様が怖かないのね、シドロルィチ！なぜ前に貴郎はそれを妾に云はなかつたの？妾はヅブロフスキーを一目なと見るのだつたのに、けれど、今度はもう何時來るか彼が復轉込むのを待つて居なくちやならんわ。良心のない人ね、まあ、貴郎は本當に恥知らずよ！』

佛蘭西人は地から生えた様に突立つてゐた。將校と約定した事、金——それは凡て彼には夢の様に思はれた。併し、紙幣の束包はちやんと彼のポケットに

在つて、雄辯に此の驚くべき出來事の存在を彼に確證したのであつた。

彼は町まで馬を傭ふ事に定めた。馭夫はとぼ〳〵と歩く樣な調子で彼を乘せて行つた、それで夜に入つて彼は町に辿着いたのであつた。

番兵の代に壞頽せる番人小舍の立つてゐた所の町の關門(ザスターワ)までは行着かないに、佛蘭西人は止る事を命じ、旅用(ブリーチカ)の車から這出て、ブリーチカと鞄は酒代として彼に與へると云ふ事を手眞似で馭夫に表して、てく〳〵と歩いて行つた。馭夫は恰度ヅブロフスキーの提供から當の佛蘭西人が驚いたと同樣、彼の豪俠から非常に驚いてゐたのであつた。併し、その事からして、「獨逸人」(猶毛唐人と云はんが如し)は氣が狂つたんだと推斷して、馭夫は眞心のあるお辭儀をして、彼に感謝した。そこで、町へ入つた所で一向香しい事はないと考へたから、その主人が彼の友達で、自分のよく知つてゐた所の遊興場へ赴いたのであ

つた。其處で彼は終夜を過し、そして、その翌朝はブリーチカも鞄もなく、眼れた顏に眞赤な眼をして、空のツロイカに乘つて我が家へ歸つて行つた。

ヅブロフスキーは佛蘭西人の書類を携へて、我々が既に見た通り、ツロエクーロフの許に勇しく姿を顯して、彼の宅に住込んだのであつた。彼の祕密の意圖は如何なるものであつたとした所で(我々は後でそれを知る)、然し、彼の行爲の中には何等の非難すべきものは表れなかつたのである。確に、彼は、幼いサーシャの教育には大して勉めないで惡戲するがまゝに凡ての自由を與へてやり、只形式の爲に與へられてゐるに過ぎない課業に對しては嚴しくは究問しなかつた。その代り自分の女生徒の音樂の研究に對しては非常な勉强を以て隨從したもので、屢々彼女と共に全一時間もピアノに對して坐つてゐる事があつた。

總ての人達は若き教師を愛した。キリーラ・ペツローウィッチは遊獵の際に彼

が勇敢で活潑で、ある事に對し、マリヤ・キリーロヴナは彼の限りなき熱心と奴隷の如な注意とに對し、サーシャは彼の惡戯に關して寛大である事に對し、家族の人達は、一見彼の身分とは兩立しない所の親切と豪俠とに對して愛したのであつた。彼自身は全體の家庭に結付けられて居り、又、已に自らをその一員と考へてゐる者と見えてゐた。

彼が教師と云ふ職分の下に入込む事となつてより記念すべき祭の時までには約そ一ヶ月は經過した、而も、此の謙遜な若い佛蘭西人の内に、その名が近所隣の總ての地主共に對しては恐怖の源となる、恐しき盗賊の祕められてゐる事とは誰一人疑念を抱く者もなかつたのである。此の期間を通じて一時もヅブロフスキーはボクロー!フスコエから離れた事はなかつた、併し、彼が掠奪の諷評は、村民共の發明的な想像のお蔭で靜らなかつたのである。けれども、又彼の

徒黨は主長の居ない時に於ても、自分等の行動を繼續する事は出來たのであつた。

自分の一身上の敵であり、且つ自分の不幸に祟つた所の主な發頭人の一人と認むる事の出來た男と一室に一夜を明すことゝなつて、ヅブロフスキーは誘惑に抵抗する事が出來なかつた。彼は懸囊の存在に就いて知つてゐたので、それを取上げてやらうと決心したのであつた。我々は、彼が俄に教師から盗賊に移變つた事に依つて哀れなアントン・パフヌーチイチを如何に驚かしたかを見たのであつた。

十二

朝の九時に、ボクローフスコエに泊つた客達は客間へ續々と打集つた。其處

では既にサモワールが煮沸してあり、その前に坐せるが朝の衣を着けたマリヤ・キリーロヴナ、同じく、粗毛布のフロックにスリッパアと云ふ姿のキリーラ・ペツローウィッチであつたが、此れは、また、廣い、大きい、洗面器かと思はれるばかりの自分の湯呑でずう〳〵と茶を飲んでゐるのであつた。最後にアントン・パフヌーチィチが現れた。彼は非常に顏色が蒼褪め、さも取亂されたる風情に見えたので、その様子は一同を驚かし、キリーラ・ペツローウィッチまでが彼の健康に就いて尋ねて見た程であつた。スピツィンは別段何でもないんだと云つた口振で胡麻化して答へ、恐怖を以て教師を見れば、これは又何事ぞ、平氣の平三の何喰はぬ顏で其處にちやんと坐つてゐたのであつた。數分が經過すると、召使が入つて來て、スピツィンに彼の幌馬車の支度が整つたと告げた。アントン・パフヌーチィチは告別を急ぎ、愴惶として部室を出て、直ちに出發した。

客達や主人は彼に何事が生じたか一向に解らなかつた、そこで、キリーラ・ペツローウィッチは彼が食ひ過ぎたものと定めて了つた。茶と別れの朝食の後には、餘の客達が方々へ歸り始めた、そして程なくボクローフスコエは空となり、總ては平常の狀態に復した。

數日は經過したが、而も何等特別注意すべき事も生じなかつた。ボクローフスコエの住民の生活は單調なものであつた。キリーラ・ペツローウィッチは毎日遊獵に出かけた。一方、讀書や、散步や、音樂の調べはマリヤ・キリーロヴナの仕事であつた、その中でも音樂の研究には特別の興味を持つた。彼女は自分自身の心を解し始めて來た事として、已が心の若き佛蘭西人の價値に對して平氣でなかつた事をば、無意的懊惱を以て認めたのであつた。彼は、自分の側からしては、決して尊敬と禮節の界を踏出す事なく、又その事を以て彼女の高慢

と臆病な疑念を靜め和げたのであつた。彼女は益々信頼を深うして來て、誘惑的な習慣に一身を委ねた。彼女はデフォルジュが居ないと淋しく感じた、彼の居る前だと、絶えず彼の事で心を充した、凡てに關しては彼の考を知らうと欲し、又何時も彼に贊同したのであつた。此の時はまだ多分彼女は彼に戀をしてはゐなかつた様である。併し、最初の偶然的な障碍に際してか、或は期待しなかつた運命の壓迫を感じた時には、情欲の焰が彼女の胸中で燃上つたに相違ない。

或時、マリヤ・キリーロヴナは教師が自分を待つてゐた所の大廣間に入つて行つて、彼の蒼褪めた顔が不機嫌に顰められてゐるのを見て驚いた。彼女はピアノを開けて、幾つかの曲を歌ひ終つた。併し、ヅブロフスキーは頭痛と云ふ口實の下に、許しを乞ひ、課業を中途で打切り、樂譜を閉ぢて、竊と彼女に書き

物を手渡した。マリヤ・キリーロヴナは考へる遑もなく、それを受取り、そして直ぐその瞬間に後悔したのであつた。然し、ヅブロフスキーは最早廣間の中には居なかつた。マリヤ・キリーロヴナは自分の部室に入り、書いた紙を擴げて、次の事を讀んだのである。

『今晩七時に小川の所の亭(あづまや)に居て下さい、是非とも貴嬢とお話しなければならない事がございます』

彼女の好奇心は強く煽立てられた。彼女は。何時もそれを欲してはゐたものゝ、一方では、危み乍ら、長い間打明けて呉れる事を期待してゐたのである。自分が推測してゐた事に關する確定を聽くと云ふ事は彼女に取つては愉快であつたには相違ない。併し、彼女は、その身分に在つては到底彼女の手を取ると云ふ事は望むべからざる筈の男からその様な打明を聞くとしたら確に醜い事だらう

と感じたのであつた。彼女は面會に行く事に決心した、ところが一つの事に躊躇したのである。彼女は教師の打明ける事を何んな風に受付けるべきか、卽ち、貴族的で憤つた態度を以てか、友誼的な說諭を以てか、愉快な冗談を以てか、それとも沈默の交感を以てかと決し兼ねたのである。その間彼女は屢々時計を眺めた。黃昏となり、燈は點された。キリーラ・ペツローウイツチは客來の隣人達とボストン（骨牌遊の中での一名）をやらうとして腰を掛けた。卓上の時計は七時に十五分前をチクタクと刻んでゐた。そこで、マリヤ・キリーロヴナは靜に階段の上に出て行き、周圍八方を見廻して、庭園へ走つて行つた。

夜は暗黑にして、空は黑雲で被はれ、自分より二足と先は何にも見る事が出來なかつた。然し、マリヤ・キリーロヴナは自分の通馴れた路を辿つて暗黑の中を歩いて行き、一分間の後には亭の方に現れたのであつた。此の所で彼女は一息

して、平氣で落着いた風をしてデフォルジュの前に現れる爲めに立止つた。然し、デフォルジュは既に彼女の前に立つて居た。

『有難うございます』彼は靜な而も哀れな聲で彼女に云つた『よく貴嬢は私の願をお拒みならないで下さいました。若しも貴嬢がそれに御同意下さいませんでしたら私は絕望しました事でせう』

マリヤ・キリーロヴナは用意してゐた語を以て答へた。

『私が親切にして上げる事で、貴方は私に後悔をさせてはいけない事よ』

彼は默つてゐた、そして勇氣を鼓してゐる樣に見えた。

『事情に驅られまして……私は貴嬢をお殘しゝて行かなければなりません』

遂に彼は口を切つた『貴嬢は直に、多分それをお聞きになる事でせう……併し、私はお別れする前に自ら貴嬢と打明けたお話をしなければならないのです。』

マリヤ・キリーロヴナは何も答へなかつた。此等の言葉の中に彼女は期待してゐた四方山の打明に對する序言を見たのであつた。

『私は貴嬢が豫想してゐらつしやるものとは違ひます、』彼は、頭を垂れて、語を續けた『私は佛蘭西人のデフォルジュではないのです、私はヅブロフスキーなんです』

マリヤ・キリーロヴナは叫聲を立てた。

『何卒、御心配なさいますな。貴嬢は私の名前を恐れてはなりません。實際、私は此の通り不幸な人間です、貴嬢のお父さんは、私からパンの片を奪去り、先祖の家から追出して大道に追剝をするやうに送りました。併し、貴嬢は貴嬢御自身の爲にも、彼の爲にも私を恐れる必要はありません。みんな濟んだ事です……私は彼を許しました。よくお聽き下さい。貴嬢は彼を救つたのです。血

を流す事で私の第一の功績は彼の上に成遂げられなければならなかつたのです。私は、何處へ火を放たうか、何處から彼の寢室へ這入らうか、何う云ふ風に凡ての拔道を彼から斷切らうかと決定し乍ら、彼の家の邊をうろついたのです。その瞬間に貴嬢が如何にも天の幻の如に私の直ぐ傍をお通りになりました——すると、私の心は和いだのです。私は、貴嬢のお住ひになる家は神聖であり。只一つの存在も血液の繋りを以て貴嬢と結付けられてゐる所の者は私の呪詛とは關係のないと云ふ事が分りました。私は、恰度氣でも狂つたせいででもあつた樣に、復讐心と云ふものを棄てゝ了ひました。日にも〳〵私は、遠方から貴嬢の白い衣服を見たいと思ふばつかりにボクローフスコエの庭園の附近を彷徨ひ歩きました。貴嬢が附添人なしの散歩をなさる場合には自分がこつそりと蔭に附いてゐる以上、其處には貴嬢に取つての危險はないと云ふ考を以て幸

福でした私は灌木から灌木の中へと潜り乍ら、貴嬢の後に隨いて歩きました。

頭到機會が來た譯です……私は貴嬢のお邸へ移住む事になりました。此の三週間は私に取つては幸福な日でした。それ等の思出は悲しい私の生涯の慰安となる事でせう……今日私は、これ以上少しも此處に留る事が出來ないと云ふ通知を受取りました。私は貴嬢と今日、直ぐにお別れします……然し、私はその前に貴嬢が私を呪つたり又輕蔑されたりなさらない爲に貴嬢に打明けておかなければなりません。時々はヅブロフスキーの事を思つて下さい。彼は他の運命の爲に生れたのだと御存知下さい、彼の魂は貴嬢を愛する事が出來、そして決して……』

此の時折しも強い口笛の音は響渡つた。そこでヅブロフスキーは口を噤んだ。彼は彼女の手を取つて燃ゆるばかりの唇に壓しつけた。口笛が再び響いた。

『左様なら』ヅブロフスキーは云つた『私を呼んでゐるのです。一分の裕餘も私を破滅することになるのです』

彼は立離れて行つた……マリヤ・キリーロヴナは身動もせずに立つてゐた。ヅブロフスキーは立歸つて再び彼女の手を取つた。

『若しも何時か』彼は優しい、而も感動的な聲を以て彼女に云掛けた『若しも何時か不幸が貴嬢に落懸つて來て、貴嬢が誰からも助も庇護も待つ事が出來ないと云ふ事がありましたなら、貴嬢は、そんな場合に、私から御自分の救助の爲の凡てをお求めになる爲に、私の許へ走つて來られる事を約束なさいますか？私の獻身を貴嬢は拒絶されないと云ふ事を約束して下さいますか？』

マリヤ・キリーロヴナは無言のまゝ泣いた。口笛が三度目に響渡つた。

『貴嬢は私を亡して了ひます！』ヅブロフスキーは叫んだ、『私は、貴嬢が私

に返答をして下さるまでは、貴嬢を捨てゝは行きません。約束して下さいますか、貴嬢は、それともいやですか？』

『約束致します！』と哀れな美人は呟いた。

ヅブロフスキーとの會見でひどく情を波立たしてゐるマリヤ・キリーロヴナは庭園から歸つて行つた。屋敷には澤山の人々が居た、階段の所にはツロィカが留つてをり、總ての人々は走廻つてをり、家では大騒動をしてゐるのが彼女の眼に入つた。遠方から彼女はキリーラ・ペツローウィッチの聲を聞きつけたので、自分の居なかつた事が認められはしなかつたかと心配し乍ら、部室へ這入つて行くのを急いだのであつた。大廣間でキリーラ・ペツローウィッチは彼女に逢つた。客達は我々の知つてゐる警察署長を取圍み、彼に質問を浴せ掛けてゐた。旅行服を着し、頭から足先まで武裝してゐた警察署長は怪訝な、而も

心配さうな顏色を表して彼等に答へた。

『お前は何處に居たね、マーシャ？』キリーラ・ペツローウィッチが訊いた『お前は Monsieur デフォルジュに會つたかい？』

マーシャは返答するに當つて辛うじてそれを否むことが出來た。

『おい、お前は何と考へらあ？』キリーラ・ペツローウィッチは續けた。『警察署長は彼を拘引に來たので、彼は紛ふ事のないヅブロフスキーだと私に云つてゐるんだぞ』

『全く人相書そつくりでございます、閣下』と警察署長は恭しく云つた。

『おゝ、兄弟』キリーラ・ペツローウィッチは遮つた『勝手な所へ行き給へ、君の人相書を持つて。』私は、自分で此の事を檢べて見るまでは、あんたに佛蘭西人は決して引渡さないです、アントン・パフヌーチィチの臆病者の馬鹿な奴の云

ふ事に何うして信用出來るものかね。彼奴は教師が引つたくらうと思つた所を夢にでも見たのだらうよ。何う云ふ理で彼奴はあの朝にその事を一口も私に云はなかつたんだね……』

『佛蘭西人が彼を嚇したのでございます、閣下』警察署長は答へた。

『そして、默つてゐると云ふ事の誓を彼から取つてゐたのでございます』

『赤嘘だ』キリーラ・ペツローウィツチは定めて了つた。『今直ぐに本當の事が分るんだよ。何處に居るんだい教師は?』這入つて來た召使に尋ねた。

『何處にも見付からないでございます』と召使は返答をした。

『それぢや彼奴を搜出せ!』と疑ひ始めたツロエクーロフは叫んだ。『君の自慢の人相書を見せて見給へ』彼が警察署長に云ふと、奴さん直ぐに紙を渡し

た。

『ウン!ウン!二十三歳と、それから何々々と。彼奴はさうだ、だつて此は何も證明してはゐないさ。何うだい教師は?』

『見付からないでございます』と云ふ答が再びあつた。

キリーラ・ペツローウィツチは不安になつて來た。マリヤ・キリーロヴナの心配は申すまでもなく、その面持は生くるものとも死せるものとも判じ兼ねたる程であつた。

『お前は眞蒼だよ、マーシャ』父は彼女に云つた『皆がお前を驚かしたのかい?』

『否、お父樣』マーシャは答へた『妾は頭痛がしますの』

『お前の部屋へお行き、マーシャ・そして心配なんかするんぢやないよ』

マーシャは彼の手に接吻して、自分の室へ急いで立去つた。そこで彼女は寢臺の上に身を投懸け、ヒステリーの發作に襲はれて、傷ましく泣いた。下女共は駈附けて行き、辛うじて彼女の衣服を脫がしてやり、やう〳〵の事に、冷水や種々なアルコール類を以て彼女を落着かす事が出來たのであつた。彼等が床に殘して去ると、彼女は微睡に落ちた。

その間に佛蘭西人は見付からなかつた。キリーラ・ペツロー・ウイツチは例の『勝鬪天地に轟きぬ』を吹鳴らし乍ら、部室の中を行きつ、戻りつした。客達はお互同士囁合つた。警察署長は馬鹿の樣に見えた。皆は佛蘭西人を見付け出さなかつたのである。多分、彼は前以て警告を受けて、姿を匿す事を得たものだらう。然し、誰と、又何うしてだらう？その事は神祕に取殘されたのであつた。

十一時が打つた。それに誰一人寢る事を考へる者もなかつた。遂にキリー

ラ・ペツローウイツチは腹立しく警察署長に云つた。

『さあ、何うですな？あんたは夜の明けるまで留つてると云ふですな。私の家は酒肉店（ハルチエブニヤ）ではないですよ。これが既にゾブロフスキーであつたとしたら、兄弟、あんたの迅速（すばしこ）さではゾブロフスキーは捕へられはしませんよ。宅へ歸りなさい。そして、今度からも少し敏活にやりなさい。それから、あんた方も家へお歸りになる時ですよ』彼は客に向ひ乍ら續けた『馬の用意をお吩咐けなさい、私は寢たいです』

かやうにツロエクーロフは薄情に自分の客達と別れたのであつた。

十三

時の幾何は何等の注意すべき出來事もなく經過した。併し、翌年の夏の初に

はキリーラ・ペツローウィッチの家族の生活狀態には多くの變動が生じたのである。

彼の所から三十露里隔つた所にヴエレイスキー公爵の富裕な領地があつた。公爵は長い間外國で生活してゐた。彼の全財産は退役陸軍少佐が支配してゐて、ボクローフスコエとアルバートフとの間には何等の交際もなかつたのである。所が、五月の月末に公爵が外國から戻つて來て、生れて以來まだ見なかつた自分の村へ歸つたのである。放逸に慣れてゐた爲に、彼は孤獨に堪へる事が出來ずして、自分が到着してから三日目には、嘗て知友であつたツロエクーロフの許へ食を共にする積りで出掛けて行つた。

公爵は五十歳ばかりであつた、併し、彼は甚しく耄けて見えた。凡ての方面での過分は彼の健康を毀して了ひ、自らの削除すべからざる印跡(スタンプ)を彼の上に捺

付つけてゐた。絶えず退屈した彼は絶えず放心の必要を有するのであつた。それにも拘らず、彼の外貌は氣持よく、且つ際立つて見えた、又、公衆と常に立交る習慣が或る慇懃さを彼に附與してゐた、それも殊更婦人に對してさうであつた。キリーラ・ペツローウィッチは彼の訪問を、世の中の事を知つてゐる人からの尊敬の徵だとして受取つたので、それに非常な滿足を感じたのであつた。彼は、自分の平常の習慣に從つて、自分の構へを觀て廻る事で彼を饗應しだして、牧犬者の屋敷へ伴うたのである。然し、公爵は犬の寮園氣に殆ど窒息せんとするばかりで、手巾を鼻に押しつけ、時々、鯨が潮を吹く樣にも似た息遣をし乍ら、出て行くのを急いだのである。剪んだ菩提樹や、四角形の池や、眞直い並木道のある古風の庭園は彼を喜ばさなかつた。彼は英國流の庭園や、さう呼ぶ事の出來る自然を愛してゐた。然し、彼は讃美し、且つ歎賞したのであつ

た。召使が食事の用意が整つてゐる事を告げにやつて來た。彼等は、そこで、食事に赴いた。公爵は、自分の散歩から疲れて、少し跛を引いてゐた、そして、最早自分の訪問に後悔をするのであつた。

所が、大廣間の中でマリヤ・キリーロヴナが彼等に出會つた——すると、年老いた情郎(いろをとこ)は彼女の美しさに驚かされたのである。ツロエクーロフは彼女の傍に客を坐らした。公爵は彼女が現れた事に依つて甦つて、愉快な心持になつて來た。そして、好奇心を起さす樣な自分の物語で數回彼女の注意を惹寄せる事に成功したのであつた。食後キリーラ・ペツローウィッチは馬に乘つて出掛ける事を云出した、併し、公爵は自分の天鵞絨製の靴を示して、自分は足痛風だなどと冗談を云つて、斷つた。彼は有蓋乘車(リネイカ)で散策する事を提議したのであつた。それは、可愛い自分の隣人と離れないが爲めであつた。リネイカが用意さ

れ、老人達と若い美人は三人でそれに乘込んで出發した。會話は杜絶えなかつた。マリヤ・キリーロヴナは此の交際に慣れた男の一寸した機智や、愛相のある世辭を愉快な心持で聽いたのであつた。と、突如ヴエレイスキーはキリーラ・ペツローウィッチに振向いて尋掛けた。

『此の燒けてる建物は何うしたんです、して、此は貴殿の所有物ですか?』

キリーラ・ペツローウィッチは眉を曇らした。燒けた邸に依つて呼覺された思出は彼に不愉快であつた。彼は、その土地は今は自分の物で、以前はそれがゾブロフスキーの所屬であつたと返答した。

『ゾブロフスキーにですね?』ヴエレイスキーは繰返した『何うしてあの素晴らしい盜賊にです?』

『彼の親父にです』ツロエクーロフは答へた『それに、その、親父自身が立

派な盗賊だつたんですよ』

『で、何處へ引込んぢやつたです我々のリナーリドは？捕へられたんですか彼は、生きてますか彼は？』

『生きてますとも、おまけに、自由自在です、まあ、何ですね、我々共の所に、盗賊と悪い事をする警察署長なんどが居る間は、大丈夫彼奴は攫まりやしませんよ。それはさうと、公爵！ヅブロフスキーは、ほれ、アルバートフで、貴殿の方を見舞つたでせう？』

『諾、去年でしたよ、彼は、多分、何か焼くか、掠奪をやつた様に思つてます。如何でせうね、マリヤ・キリーロヴナ、此のロマンチックな英雄と一すばかりの間知合になつて見るのは面白い事ではないでせうか』

『その面白い事にはです！』ツロエクーフは云つた『此の娘は彼と知合です。

彼は全三週間娘に音樂を教へたのです。そして有難い事には給金を一文らずでしたよ』

茲に於て、キリーラ・ペツローウイッチは佛蘭西人の教師に關する想像で揑ね上げた嘘だらけの一部終始を物語り出したのであつた。マリヤ・キリーロヴナは針の上にでも坐つてゐる様な心持であつた、ヴエレイスキーは深い注意を以て聽きながら、全く非常に不思議だと云ふ事を見出した、それから話題を轉じた。歸る道中、彼は自分の箱馬車を廻して吳れる様にと命じた、そして、泊る爲めに停る様にとのキリーラ・ペツローウイッチからの切なる願にも拘らず、茶の後で直ぐ出發したのであつた。併し、その前に、キリーラ・ペツローウイッチにマリヤ・キリーロヴナと一緒に彼の許へ遊びに來る様にと乞うた、そこで、高慢なツロエクーロフは約束したのであつた。その譯は、二つの星と三千人の

傳來の所有財産を持つ公爵の位階を尊敬して、或程度まで、自分と同じく公爵ヴエレイスキーを認めたからである。

十四

彼の訪問後二日を經て、キリーラ・ペツローウィッチは娘と共にヴエレイスキーの許へ客に赴いたのであつた。アルバートフに近附くに及んで、その綺麗な、樂しさうに見える百姓共の住家や、イギリスの城風の趣に建てられてゐる石造の主家などを目のあたりに眺めては、それ等は全く歎賞に餘りあるものであつた。家の前方には楕圓形の濃い綠色の草原が打擴つて見え、其の處では瑞西産の牝牛が飼はれてゐて、それが自分々々の小鈴をチリン〳〵と鳴らしてゐたのであつた。廣々とした公園は四方からその家を取卷いてゐた。

主人は階段の方で客を迎へ、若き美人に手を與へた。彼等が宏壯な大廣間へ入つて行くと、其處では三人前の食器が食卓の上に用意されてあつた。公爵は客を窓際に導いた、と素晴しい眺望は彼等の眼前に打開けて見えた。ウォルガの河が窓の前を流れてゐた。河上には滿腹の帆を揭げた、荷物を積載した船も通つて居れば、又、其名も頗る言表的な消魂丸（ヴシエヴーヅカ）と呼ぶ小さな漁舟がチラ〳〵見えてゐた。河の彼方には丘や、野原が打續いてゐた。數ヶ村は近所近鄕に生氣を與へてゐた。それから彼等は外國で公爵の買つて來た繪畫室の繪を一々觀ることゝなつた。公爵はそれ等の色々別々の價値と短所とをマリヤ・キリーロヴナに說明した。彼は繪に就いて云ふに教授法的（ペダゴヂカル）の識者の立場からする、理由を持つ所の言葉ではなくして、ただ感じと想像とに依つて話すのであつた。マリヤ・キリーロヴナは滿足して彼の話すのを聽いてゐた。食事に赴いた。ツロエクー

ロフは自分の主人の酒と彼の料理人の老練さに全く感心して了つた、が、マリヤ・キリーロヴナは自分が生れてから只の二度目に會つたばかりの人との談話中些の混亂も感じなければ、又窮窟さも感じなかつた。食事の後で主人は客に庭園へ出て行かうと申出た。彼等は島の散在してゐる廣い湖水の岸に立つてゐる亭でコーヒーを飲んだ。俄に笛の音が響き渡つた、と、六挺の橈を立てた艇がその亭の所へ漕着けられたのであつた。彼等は湖上に漕出して、島の周を乘り、その中の幾つかを訪問した。その一つの島には大理石の肖像があり、又一つには淋しい洞窟があり、又次の一つには公爵の鄭重な云控で充分に滿足されない、娘としての好奇心をマリヤ・キリーロヴナに呼覺した神祕的な碑文のある記念碑があつた。時間は氣の付かぬ間に過去つた。黄昏れ始めた。公爵は、冷たくなるのと、露が下りるのとを口實に、歸路を急いだのであつた。サモワー

ルは彼等を待受けてゐた。公爵はマリヤ・キリーロヴナに年老いた獨身者の宅で主婦役を演ずる樣にと乞うた。彼女は親切な好話者の盡きぬ物語を聞き乍ら、茶を注いだのであつた。俄に發射の音が響渡つた、――と火箭が天空をぱつと照した……公爵はマリヤ・キリーロヴナに肩掛を渡してやり、彼女とツロエクーロフを露臺へ呼んだ。家の前で、暗闇の中に於て、種々雜多の色の火が發火し、廻轉し出し、穗となつて上空へ飛上り、噴水と注ぎ、雨と降り、星と散り、消滅して了つては、復新に發火した。マリヤ・キリーロヴナは小兒の如に、浮々と愉快な心持になつた。ヴエレイスキー公爵は彼女が歎賞する事を以て打喜び、ツロエクーロフは彼に非常な滿足を覺えたのであつた。何故と云ふに、彼は、公爵の有ゆる努力を彼を饗應する尊敬と希望の徵として受取つたのである。

夕餐はそれ自らの價値に於ては晝食と譲る所がなかつた。客達は彼等に分與されてあつた部室へ赴いた。そして翌日は朝の中に、互に近い中に再び面會する約束を與へて、親切な主人と別れを告げたのであつた。

十五

マリヤ・キリーロヴナは自分の部室で、開け放された窓際に坐つて刺繍をしてゐた。彼女は、憧れる戀心の夢現で、薔薇の花を綠の絹糸で縫ひとつたコンラードの戀人と同樣に、絹糸を混亂させはしなかつた。彼女の針の下で、粗布(カンヴァ)は下繪の模樣を間違なく繪取つて行つた。その癖、彼女の心は仕事の事を考へてゐるのではなくて、遠く〳〵馳せてゐた。

不圖窓に手がそつと伸ばされた、誰だか縫箔架の上に手紙を置いて、マリヤ・

キリーロヴナの氣の付く前に隱れて了つた。丁度此の瞬間に召使が其處へ這入つて來て、彼女をキリーラ・ペツローウイッチの許へ呼んだ。彼女はドキッとして、手紙を三角布の蔭に匿し、書齋に居る父の許へと急いで行つた。

キリーラ・ペツローウイッチは一人ではなかつた。ヴエレイスキー公爵が彼の傍に坐してゐた。マリヤ・キリーロヴナが現れた時、公爵は起立し、そして、彼の平常にもなく、混亂して、默つたまゝお辭儀をした。

『此處へお出で、マーシャ』キリーラ・ペツローウイッチは云つた『私はお前にお知せする事があるがね、それはお前を喜して吳れるだらうなあ。それ、此處にお前の花婿さんが御坐る。公爵はお前に結婚を申込んでゐらつしやるのだ』

マーシャは樗の如に立竦んだ。死人の樣な眞蒼な色が彼女の顏を被つた。彼

女は無言でゐた。公爵は彼女の許へ歩寄り、その手を取り、それから感動さす様な面持で、彼女が彼の幸福を來す事に同意して呉れるかと訊いたのであつた。マーシャは口を緘してゐた、

『同意してゐますよ、勿論、滿足してゐます』キリーラ・ペツローウイッチは云つた併し、お承知の通り、公爵、此様なことは娘に取つては云出しにくいものですよ。さあ、お互とも接吻をお爲なさい、そして幸福にお成りなさるのです』

マーシャは身動もせず立つてゐた、老いたる公爵は彼女の手に接吻した。俄に涙は彼女の眞蒼な顏を傳つて流れ落ちた。公爵は微に眉を曇らした。

『彼方へ行つてお出、お行き、お行き』キリーラ・ペツローウイッチは云つた『お前涙を拭いて機嫌を直して此處へ戻つてお出。若い女と云ふものはみんな

婚姻の契約の時には泣くんですよ』彼はヴェレイスキーに振向き乍ら語を續けた。

『此の事は彼等には既にさう云ふ風に出來てゐるのですね、かうつと、では、公爵、これから實際問題に就いて、詰り、その持參物の事に就いて打合せする事にしませう』

マリヤ・キリーロヴナは退去の許を得た事を此の上もない好機會としたのであつた。彼女は自分の部室に走込んで、扉を閉め、そして自分を老いたる公爵の妻として想像し乍ら、思ひ存分泣いて〳〵泣き續けたのである。

彼は俄に彼女に取つて擯斥すべき、厭な〳〵者に思はれて來た……婚姻と云ふものが恰も斬頭臺や、墓の様に彼女を戰慄さした!……

『否、否!』絶望に陷つて彼女は繰返した。『それよか、修道院に行く方がま

しだわ……ヅブロフスキーと結婚した方が……』

此の時、彼女は手紙の事を思出した――そこで、それがヅブロフスキーからのものである事を豫感し乍ら、貪る如く、それを讀みに掛かつた。實際、それは彼に依つて書かれたもので、只次の言葉だけが書込まれてあつた。

――今晩、十時、以前の場所にて――

月は輝いてゐた。村の夜は靜かであつた。時々風が吹起つて、輕いサラ〳〵と云ふ音が庭中一杯に走渡つた。

輕い影の如く、若い美人は面會の定められてあつた場所へ近寄つて行つた。未だ誰も見えなかつた。俄に亭の蔭からヅブロフスキーが彼女の前に立現れた。

『私は總てを知つて居ります』彼は靜な、而も悲調を帶びた聲で彼女に云ひ

掛けた。『貴嬢の御約束を思出して下さい』

『貴方は妾に御自分の庇護をお申込みなさいますの？』マーシャは答へた、

『然し、憤つてはいけませんよ。それは私を嚇すものですわ。怎んな風に貴方は私に御援助をお示し下さいますの？』

『私は厭な〳〵男から貴嬢を引離して上げる事が出來るのです』

『おゝ、後生ですから、彼の人に觸れないで下さいまし、若し、貴方が私をお愛し下さるのでしたら、彼の人に觸れようとなさらないで下さい。私は何んな恐しい事の原因ともなりたくはありません……』

『私は彼に觸れますまい。貴嬢の御意志は私に取つては神聖です。彼は貴嬢に自分の生命を負うてゐます。決して悪い行爲は貴嬢の御名に於て致しますまい。貴嬢は私の犯罪の中に於てさへ潔白でなければなりません。然し何うして

殘酷なお父さんから貴嬢を救つたらいゝでせう?』

『まだ望は御坐いますわ。私は私の涙と絶望とに依つて彼を感動さしたいと望んでゐますの。父は强情ですけれど、又大變私を可愛がつて居りますから』

『詰らない事に望を懸けてはなりません。かうした涙の中には、彼は、情愛と云ふものが動機で嫁ぐのでなくて、利狡な利害的關係からする場合に、一般凡ての若い娘達に普通な所の臆念と、嫌惡としか見は致しません。併し、若し彼が貴嬢御自身に反いて貴嬢の幸福を作らうと自分の頭に考へてゐるとしましたなら?若しも、貴嬢の運命を年老いた夫の權限内に擲與へようとして、結婚の冠の許へ貴嬢を强ひて導いて行くとしましたなら?』

『其の時は……其の時は愈々致方はございませんわ——私の所へ來て下さいまし——私は貴方の妻になりませう』

ヅブロフスキーは驚き戰いた。蒼白の顏が濃紫色の紅で被はれたと見たら、その瞬間にサッと消えて、前よりも一層蒼くなつた。彼は、頭を垂れたまゝ、長い間無言でゐた。

『出來る丈けの勇氣をお出しなさい、お父さんに哀願なさい、彼の足下へ身を投掛けなさい。彼に未來の凡ての恐怖を、弱々しい淫佚な老人の身邊で萎れ朽ちて行く貴嬢の青春の事を申上げなさい。富と云ふものは幸福の一分間にも價しない事をお云ひなさい。贅澤は只一つの貧困を慰めるもので、それすらも決して常住ではなく、一瞬間丈けのものです。希望の影丈でも殘つてゐる間は、彼を措いて置いてはなりません、彼の怒にも、嚇しにも驚かされてはなりません。何卒後へはお引きなさいますな。若しも萬一、最早他に施す手段がないとなりましたなら——殘酷な打明をする事に御決心なさい。若しも、彼が頭

として承知しないならば、そんなら……それならば貴嬢は恐しい防禦の道を見付け出すと云ふ事をおつしやい……』

此の時ヅブロフスキーは手で顔を被つた。彼は息を塞らしてゐる様に見えた。マーシャは聲を立てゝ泣いた。

『あゝ、悲しい、哀しい、私の運命は何と云ふまあ哀れな！』彼は傷ましく歎息し乍ら云つた。『……貴嬢の爲に私は私の生涯をお捧げしたでせうに。遠くから貴嬢を眺める事は、貴嬢のお手に觸れる事は私を此の上もない幸福に醉はしたのでした。それに、私は、此の激しく動悸打つてゐる私の胸に貴嬢を壓つける事の可能が與へられ、「私は永久に貴嬢の物です」と云ふ事の出來る時——あゝ、私は、哀れな人間だ！私は幸福から用心し、警戒しなければなりません、私は全力を以て自分からそれを突除けねばなりません！私は、貴嬢の足下に身を投

掛けて、此の不可解な、適當とされない所の報酬に對して天に感謝を捧げる事を敢てする事は出來ません。おゝ！何れ丈け私はそれを惡まなければならない事です……然し、今、私の情(こころ)の中には何處にも嫌惡と云ふものが存在しない事を感じて居ります。』

彼は靜に彼女のすらりとした體軀を抱き、優しく彼女を自分の心臓に抱寄せた。彼女は打委せて盜賊の肩の上に頭を垂れた、……二人は無言でゐた……時間は早く過去つて行つた。

『もう時間ですわ』と遂にマーシャが云つた。

ヅブロフスキーは恰も微睡から覺めた様な風であつた。彼は彼女の手を取つて、指に指環を嵌めてやつた。

『若しも私の許へ走つて來る事を御決心なさいましたなら』と彼は云ひ出し

た『その時は、指環を此處へ持つて來て下さい、それを此の樫の洞の中へ入れて下さい。私は何うしたらよいか分りますから。』

ヅブロフスキーは彼女の手に接吻し、それから樹々の間に身を隱して了つた。

十六

ヴエレイスキー公爵の求婚の事は近隣の人達に取つて最早隱れの無い事實であつた。キリーラ・ペツローウイツチは祝辭を受けた。結婚の準備がせられた。マーシャは、今日よりも明日にと、毎日々々決定的な打明を延置くのであつた。其の間に於て、老いたる花婿に對する彼女の態度は冷く、且つ戦闘的であつた。公爵はその事に關しては心を煩はさなかつた。彼は愛などと云ふことは問題にしてゐないで、彼女が無言で承諾した事を以て滿足であつた。

然し時日は經過した。マーシャは遂に行動する事を決心して、ヴエレイスキー公爵に手紙を書いた。彼女は彼の情の中に寛大な氣分を呼覺さうと力めた。彼に對しては毛頭も愛着を有つてゐないと云ふ事を白狀して、彼女の手を棄てるやうにと懇望し、又彼にも父の權勢から彼女を擁護して呉れるやうにと願つた。彼女は大人しくヴエレイスキー公爵に手紙を手渡した。先生それを私に一人で讀下した——所で、自分の花嫁が打明けた事で感動させらるべき物とては此れつぱかしもなかつた。其の反對に、彼は結婚を早める必要を認め、又その爲に手紙を未來の外舅に見せる事が必要だと考へた。

キリーラ・ペツローウイツチは嚇と憤つた。公爵は、彼が彼女の手紙の事を知らされてゐると云ふ事を顏色にさへ表さない樣にするのに辛うじて彼を諫止める事が出來た。キリーラ・ペツローウイツチは彼女にその事を話さない事に同意

した、併し、時日を裕餘すべきでないと決心して、その翌日を婚禮の日と定めたのであつた。公爵は之を甚だ賢い分別と見て取つて、自分の花嫁の許に行き、手紙は非常に彼を悲ませたが、彼は同時に彼女の愛着を得る事を期待してゐると彼女に告げた。又彼女を棄てると云ふ考は彼に取つては餘りに苦痛であつて、此の自分の死の宣告に對して許容する力は持つてゐないと云つた。そこで彼は恭しく彼女の手に接吻し、キリーラ・ペツローウィッチの決心に就いては一語も云出さずに、出發して了つた。

併し、漸く彼が屋敷を乘出すや否や、彼女の父は這入つて來て、彼女に明日の日に對して用意をしてゐるやうにとキツパリと命令した。ヴエレイスキー公爵の說明で既に胸を擾亂さしてゐたマリヤ・キリーロヴナは潛然として涙を流し、父の足下に身を投伏した。

『お父様！』彼女は悲しさうな聲を出して叫んだ『お父様！私を滅さないで頂戴、私は公爵を愛してはゐません。私は彼の人の妻にはなりたくありません』

『それは何事だ？』嚴しくキリーラ・ペツローウィッチは云つた『今までお前は默つて承諾して居り乍ら、今となつて、何も彼もみんな定つてゐる時となつて、お前は轉意(きがはり)して、拒まうと考出したのか？愚痴な眞似を仕出來かすのぢやない。此の事ではお前は私に少しでも打勝つ事は出來ないぞ』

『私を滅さないで頂戴！』哀れなマーシャは繰返した。『なぜ私を御自分から追放つて、愛しもしない人にお渡しなさいますの？まあ、貴方は私が厭になりましたの？私はこれまで通り貴方と一緒に留つて居たうございます。お父様！貴方は私が居なくなれば悲しくなりますわ、そして私が不幸だと云ふ事をお考

へになる時はもつと〳〵悲しくなりますわ。お父様！私を攻めないで下さいまし、私はお嫁には行くのは厭です』

キリーラ・ペツローウイツチは感動されてゐた、併し、自分の混亂を匿し、暴々しく云つて、彼女を突飛ばした。

『みんなそれは譫語だ、聽いてるかい？私の方がお前の幸福に取つては何が必要かはお前よりもよく知つてゐるんだ。涙はお前の助にはならないぞ。明後日はお前の結婚だぞ』

『明後日！』とマーシャは叫んだ。『まあ！否、否、なりませんわ、そんな事があつてはなりません！お父様、お聽きなさいまし。若しも最早貴方が私を滅す事をお決定なりましたのなら、私は、貴方がお考へにさへもならない人を擁護者に見出しますよ。貴方は御目が覺めますわ、貴方は何處まで私を追立てゝ

來た事かと今更ビックリして恐れますのよ』

『何だつて？何だあ？』ツロエフーロフは云つた『威嚇する？私を威嚇する？不屈け千萬な尼ッ子だ！お前は何うされると思つてらあ、お前が夢にさへ考へてない所の目に遇ふんだつて事は覺悟かい？能くもお前は擁護者を以て私を嚇さうとするね！見て見ようかい、何んな奴かその擁護者と云ふのを』

『ウラヂミル・ヅブロフスキーよ』絶望のマーシャは答へた。

キリーラ・ペツローウイツチは彼女が氣を狂したものと思ひ、驚いて彼女を見つめてゐた。

『宜しい！』暫く默つてゐた後彼は娘に云つた。『誰なりと、好いた奴を擁護者に待つてゐるがいゝ。併し、それ迄は此の部屋の中に坐つてゐるんだ——お前は部室から愈々結婚と云ふ時までは出る事は出來ないぞ』